あすなろ書房●新シリーズのご案内

小学生から大人まで楽しめる「名画」入門シリーズ

はじめてであう絵画の本（全16巻）

アーネスト・ラボフ　編著
みつしまちこ　訳

小学校中学年～一般むき　各巻定価1,700円　セット定価27,200円

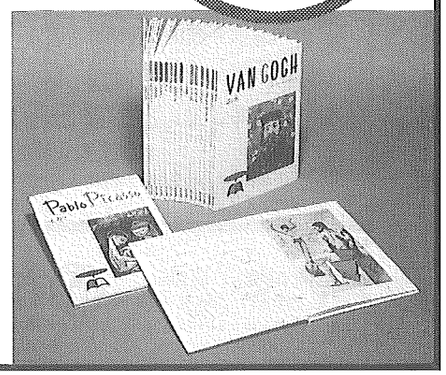
欧米で定評ある世界的名著

わかりやすい！
●「名画」と作品の解説が、見開き2ページで鑑賞できる方式。

楽しい構成！
●ポイントとなる言葉に色文字を使い、やさしく解説。

本物が見える！
●巨匠の人生、作品、絵画の見方が、ダイナミックに伝わってきます。

①レオナルド・ダ・ヴィンチ
②デューラー
③ミケランジェロ
④ラファエロ
⑤ベラスケス
⑥レンブラント
⑦ルノワール
⑧ルソー
⑨ゴーギャン
⑩ゴッホ
⑪レミントン
⑫ロートレック
⑬マチス
⑭クレー
⑮ピカソ
⑯シャガール



あすなろ書房　〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町551
TEL(03)3203-3350 FAX(03)3202-3952

学校図書館

1995年5月号／第535号

ニュース　10

特集　図書館の安全・防災対策

災害時に学校図書館を守るものは何か；
兵庫県SLAからの報告・田中　勝　12

学校図書館の危機管理計画に阪神大震災をどう生かすか；
学校救済センター構想の提案のなかで・佐野友彦　21

学校図書館施設の安全計画・植松貞夫　40

北海道東方沖地震の経験と今後の地震対策・川目　將　谷村和子　47

主要教育雑誌記事索引　52

〈リレー連載・学校司書がんばる／青森県〉
地震と図書館；三陸はるか沖地震を経験して・工藤道子　65

〈連載・電子出版Survey・2〉
整備が進むマルチメディア環境・小畑信夫　69

〈投稿〉
5年生のための読み聞かせ・白上末知子　72

ひととき　76

〈連載・わたしの絵本日記・2〉
読み方を演出する・永島倫子　79

〈いきいき学校図書館〉
大阪市立加美小学校　83
奈良県　帝塚山中・高等学校　84
高知県立高知追手前高等学校　85

〈躍動するSLA〉
北海道・大川秀明　87

あんどうさかDIARY　88

表紙絵（読書感想画）「光」

／兵庫県明石市立大蔵中学校2年　石田　貴子

〈作画の動機〉
この本では、精神が病弱であったり、つむじまがりであったりする子供達が、誰の目にもふれることのない枯れた花園に花を植えることを通じて、心を通い合わせ、大人の手を借りずに自らの力で「自立」をしてゆくところが魅力的だった。私は、この花園は、彼らの心の象徴であり、閉ざされていた扉を、心を開き、耕すことで、心を豊かにすることができたのだと思う。生気に欠けていた心に希望の光が射してきた様子を描く為に心を砕いた。（'94年度読書感想画中央コンクール最優秀賞受賞作品）
読んだ本：秘密の花園（フランシス＝ホジリン＝バーネット作　茅野美ど里訳　偕成社）

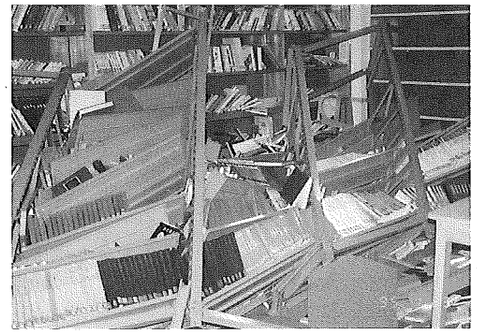
編集委員＊金子卓＊日高真理＊小畑信夫＊今村秀夫＊千國徳隆・森田盛行＊石井宗雄＊山岡洋子＊宮内佐和子＊黒木義博＊福田真由美　表紙デザイン／村上たけし

次号予告　特集／正念場を迎えた「新5カ年計画」

◈特集／学校図書館の安全・防災対策

災害時に学校図書館を守るものは何か　兵庫県SLAからの報告

田中　勝



1．ある学校の被害の情景

南館3階の図書館をのぞく。スリッパが散乱し、軽読書コーナーのテレビとビデオデッキはことごとく床に転倒し、カードケースも崩れるように倒れ山をなしている。まずスリッパを片づけて奥に入る。最初に飛び込んできたのは、8段の書架から落下した本の山であり、次には部屋の奥に設置されていたスチール製の書架5連がよじれて倒れている姿である。展示用書架はもちろん、4万冊の本は最下層を除いて9割が床に瓦礫のごとく積もっていた。更に、作り付けで天井まである4メートル幅の書架が全面、移動黒板と大型本書架・カウンターの上に倒れかかっている。入り口の横でありながら最後に気付いたのは、壁に面していた倒れた書架の裏面が一見倉庫の屋根に見えたからではなかろうか。

1月20日からの整理は入口から順に散乱した本を床に並べて奥に進む。よじれたスチール製書架は運び出し、倒れた書架の下の本は潜り込み、取り出し、書架は裏から何か所か補強。1月30日に教員10人の手で起こし、壁に止め金を打ち付け一応の修理を終え、貸出しを呼びかけた。同時に進行していた本の整理には、本校生徒ボランティア・図書館利用者有志・時間数補充の必要生徒等の手を借りた。

これが私の学校(神戸市立神港高等学校)の図書館の被害とその対応の状況である。

2．被害状況

今回の震災の被害は「震源断層に即し、帯状に被害が分布する」(科学朝日)と言われ、事実、場所のわずかなずれで被害は全く異なっている。被害を図書館に限定し、その直接的な被害を報告にみると、危険状態の学校7校、焼失校1校を含め8校。周辺状況からみて意外に少ない。

(1)　生徒たちの状況

公立学校児童生徒の死亡状況（県教委発表3月10日現在)を見ると、小学生162名、中学生81名、盲・養護学生3名、高校生41名、計287名となっている。

また、被災、避難そして知るべに身を寄せるべく学校を離れていった子どもたちはどれほどいるのだろうか。回答を集計すると表1のようになる。

この他、生徒数が約半数になったとの報告が4校あった。転出先は兵庫県1万人・大阪7千人、続いて京都千人、岡山9百人台と周辺部から北海道94人、沖縄77人と全国に及んでいる。

表1　生徒の異動状況

減少数	−700	−500	−300	−200	−100	−50	+60	+50	+40	+30	+20	+10台
校　数	1	2	5	5	13	8	1	2	6	14	9	28

ある学校からは「仮入学の生徒を受け入れたり、来年度では仮設住宅入居者から転入も予測されます。考えなくてはならないことは、特に被災された方々（生徒達）への配慮と被災しなかった生徒達との心情的ギャップをどう埋めるか、何とか心の問題を解決する方法として読書のあり方を考えていきたい」(須磨区中）との報告もあり、被害の大小や有無に関係無く、全体に突き付けられた問題として考えなくてはならない。

(2)　施設・設備の状況

西宮市の施設・設備の被害についての(✓)図書がどのような所に落下したか。倒れた本棚の下に何がどのように配置されていたか等といった配置の問題と更に個々に地震対策がなされていたかどうかといった問題である。

報告の中で「本棚を木製、据付けにする予定をしています」(西区中)ときっぱりと決断したかのことばに接し、施設設備への細かな調査による確かな見解を早急に出すべきではと考えさせられた。

(3)　図書館の使用状況

では、図書館の使用状況はどうであったか、今回の調査から報告しよう。(表2以下)

表3の転用は、その内容が教室・倉庫・本部等とあり、避難所となったことに起因する。

表2　図書館が使用できない学校（神戸市）

区名	東灘	灘	中央	兵庫	北	長田	須磨	垂水	西	合　計
回答校数	17	10	6	14	31	15	27	31	24	175
不使用校	13	8	4	10	2	11	10	5	0	63

表3　図書館が使用できない理由（複数原因校あり）

理由	避難所	転用(教・倉他)	未整理	危険
校数	31	21	6	8

調査結果は、書架・本棚が最も多く、他にカードケースありロータリーケース、展示ケース、机、ロッカー、時計、ストーブ等々図書館備品のすべてにわたっている。材質はスチール製あり木製ありで、統計からは、何が丈夫で安全かといった規則性が見えてこない。神戸市の調査でも同じである。散乱した本が壊れた手洗いの水で濡れたといった西宮市の報告などもあり、物理的には図書館がどの建物の何階にあったか。倒れた書架や散乱した従って、理由の80%が避難所となったからだと考えられる。

だとすると、学校図書館活動の安全な運営は学校の建物が安全であれば保障されるのではなく、地域住民の安全が守られなくては確保できないと言えよう。

(4)　地域住民と学校図書館

では、地域住民の被災による避難者はどうであったろうか。

特に気にかかったことは、学校内での図書館の立地条件の良否が、避難所に利用されるかどうかを決めていることである。校内のよく活用される便利な場所を確保することが学校図書館の成否の要因の一つだが、災害時は条件のよい図書館がまず転用されることとな

表４　避難所数と人数（３月１日民生局調べ）―公立校のみ―

区名	東灘	灘	中央	兵庫	北	長田	須磨	垂水	西	合　計
校数	２１	１７	２０	１９	４９	２３	３３	３５	３９	２５６
避難所校	１７	１６	１７	１８	３	２２	２０	１８	４	１３５
平均人数	４２１	５０２	４７４	３０９	１５	５２６	３４１	１９	１３	

る。図書館を守るとはどうすることか。考えねばならぬ重要な問題であろう。

図書館が図書館として機能し、一般の人たち（避難者）にも開放されればと考えればどうであろう。報告の中で、避難所への寄贈本が多くあったことは幾つかの学校（須磨区小・中・兵庫区小）から報告され、「生徒は利用できないので……」といったことばが添えられた報告があった。一方「避難者の人にも本を読んでもらっています」（兵庫区小）、「体育館の避難所へ雑誌や図書を置いて読んで貰っています」（西宮市小）更に、学校の校舎内にある市民図書館について「市民図書館を利用させてもらっている」（須磨区小）との報告もあった。

緊急時だからとは言え、児童生徒だけでなく、被災された方々と図書館の本が共に読まれ、寄贈本が共有されていた学校があった。

学校図書館も児童生徒のみを対象とするのではなく、地域に開かれた図書館であるべきであろう。災害時はともに被害者であり、共に立ち上がるべき仲間なのだから……。また、児童生徒は同時に避難者であるのだ、と考えるのだが、どうだろう。

３．災害時だからこそ活動を！

(1)　報告のために

２月２日の各県 SLA 事務局長会議で、兵庫県の被災状況の一端を報告して欲しいとの連絡を受け、すぐ被災状況を知るために神戸市教委へ問い合わせた。「学校の状況は判っても図書館までは…」。研究部会の責任者に問えば「今はそれどころではない…」。後日判ったことなのだが、全国 SLA の学校図書館及び読書指導に関する悉皆調査を内容も見ないで早々に調査中止を決め、「今頃そんなこといったら皆に怒られる…」と言っていたとか。

一方、西宮市の SLA 事務局次長からは、「初めて登校した生徒のなかに、担任の名前も忘れていた子どもが何人かいた」との報告を受けた。神戸市教委は文部省からの「こころのケア」の通達のコピーを流しただけ。いたたまれなくなった。

日本児童図書出版協会などが被災地に本を贈る運動を展開していることを聞き、図書を受け入れること、人の善意をしっかり受け止めること、これは教師の役割だと思う。

管理する立場の人たちは、図書館は学校の一部であって、災害時には無用のものと考えているのではなかろうか。子どもたちの心にまで思い及ばないようだ。しかし、教師たちにはそれぞれに立場や仕事があり、その立場を生かしてこそこの震災から、よりよく立ち上がれるのではなかろうか。

心に傷を負った子どもたちには「読み聞かせ」が必要だと考えた。読書の原点に立ち戻り、いま図書館に関わる人は「読み聞かせ」の必要性に気づいてもらいたい。調査をすることを通して各先生に気づいてもらいたい。その想いが、事務局長単独名で最初の呼びかけを送付することとなった。

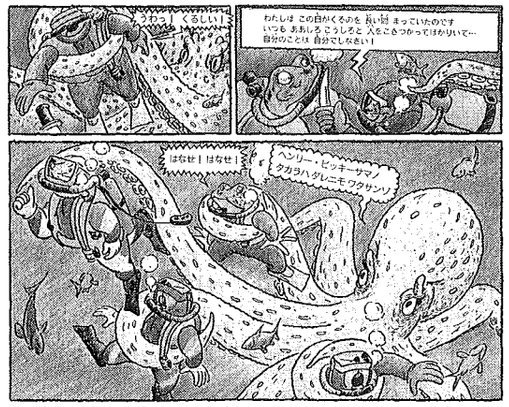
(2)　子どもの心を癒すために

「児童生徒の心の痛みを癒すために『読み聞かせ』を奨めてください」の表題で、「図書館を担当している者は今、本を通して子どもの心の傷を癒す活動をするべきではないでしょ

●１年生から●　たっぷり　ゆっくり　おもいっきり　楽しめる月刊誌

◎定価８５０円（税込）
◎オールカラー
◎29×22cm／本文74頁
◎毎月１日発行

おおきなポケット



漫画「沈没船の宝」より

６月号の主な内容

お話…試合の朝、野球が大好きなそーくんは大はりきり！　ヒットはうてたかな？**「そーくん」**ねじめ正一作／菊池日出夫絵　**科学…**知らない国のめずらしい列車に乗って、さあ、つぎはどんな国？**「きみのキップはのりほうだい」**西片拓史作　**漫画…**ひきがえるのヘンリーが宝をさがしに出発する**「沈没船の宝」**大友康夫作　●どうぞ、お楽しみに！

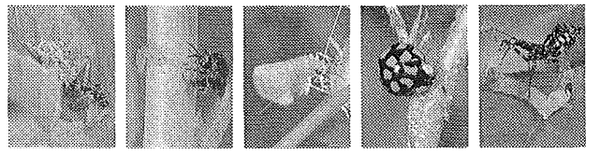
福音館の小学生向け月刊誌　６月号

●３年生から●　毎月１テーマ。じっくり、ゆかいに、”ふしぎ探検”！

月刊 たくさんのふしぎ

◎定価６８０円（税込）
◎オールカラー
◎25×19cm／本文40頁
◎毎月１日発行

６月号　藤丸篤夫 文・写真
「ノイバラと虫たち」



東京近郊にある、ふつうのノイバラの木。５月には、たくさんの美しい花を咲かせます。よく見ると、この一本の木の上で食べる虫と食べられる虫が、すさまじいドラマをくりひろげていました。子どもたちもごく身近に見ることができる、ふしぎな虫たちの世界を、昆虫写真家の著者が紹介します。

〒113　東京都文京区本駒込6－6－3　福音館書店　TEL03-3942-1226　FAX03-3942-9691

集英社版 学習漫画 地球の歴史〈全3巻〉

①地球46億年のなぞ

監修＝国立科学博物館名誉会員 小畠郁生／漫画＝岩井 渓

誕生してから46億年！壮大な地球の歴史と神秘を解明。

宇宙でもまれな生命が宿る水の惑星誕生の謎、恐竜の繁栄と絶滅、哺乳類の進化と人類誕生の秘密…。地球46億年の軌跡とそこに棲む生命の不思議をマンガ、写真、イラストでわかりやすく詳解。

〈第1章〉**地球誕生**
地球誕生のようす／マグマにおおわれた原始地球／海の誕生／他

〈第2章〉**生命の誕生**
生命の誕生／カンブリア紀のふしぎな生物／陸にあがる生物／他

〈第3章〉**恐竜の時代**
世界にひろがる爬虫類／恐竜の分類／巨大な恐竜／他

〈第4章〉**消えた恐竜のなぞ**
ナイフのつめを持つ恐竜／最強の恐竜ティラノサウルス／他

〈第5章〉**人類の時代**
爆発的にふえた哺乳類／巨大な鳥ディアトリマ／人類の誕生／他

●**地球の歴史/なんでも研究**
遺伝情報をつたえるDNA／絶滅が進化をおしすすめる／他

●好評発売中／定価1,200円(税込)●菊判／総192頁

続刊 予価(各)1,200円

●5月中旬発売予定
②大自然のすがた
監修＝東京都立新宿山吹高等学校校長 横尾浩一
漫画＝熊谷さとし
〈第1章〉地球のすがた 地球の大気と水
〈第2章〉地表のすがた いろいろな地形
〈第3章〉気象のふしぎ 気候と自然現象
〈第4章〉海のすがた 海の自然と科学
〈第5章〉大地にくらす生命 環境と生物

●6月中旬発売予定
③生きている地球
監修＝国立科学博物館地学第一研究室 斎藤靖二
漫画＝下栃棚正之
〈第1章〉地球ってなんだ 地球のしくみ
〈第2章〉生きている地球 火山と地震
〈第3章〉地球をつくるもの 岩石と鉱物
〈第4章〉動く大陸のなぞ 大陸移動説
〈第5章〉地球からの贈物 資源と人間生活

集英社 〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

うか。こころの暖まる本、人を思いやる気持ちがわく本、……、再生に向け立ち上がる本等々、図書館の使用ができなくても、数冊の本を読み聞かせることで、子どもの心を温かくさせる実践をしていただきたいと思います」と呼びかけ、『読み聞かせ―この素晴らしい世界―』の帯と裏表紙のコピーを同封した。加えて、①図書館の使用の可否、②図書の傷みの程度、③図書館活動の有無、④転入転出生の数、以上四点を聞く葉書をも入れた。

「回収は期待できない」の忠告に反して、70％にせまる回答があった。心にぬくもりを感じた。

(3) 学校図書館活動の理念の確認のために

最初の調査の回答の中で「学研から寄贈をうけ、ありがたかった」（北区小）「あちこちから沢山本を頂いてます。今のところ収納場所が少ないのです」（兵庫区小）「本をいくつか寄贈してもらっているが、はっきり言って仕分けの手間がかかるので、もう結構です。幸い今までの本が無事でした。（マンガ、学習雑誌、幼児向けの本など、もて余すものが多いので困っています）」（須磨区小）。といった報告を受け、読書活動への一層の働きかけの必要性を感じた。収納場所や仕分けに心を向けるのではなく、最も大切なものは何かを見定めてもらいたい。被災地で、目標を見極め、本と子どもを大切にする活動の真っただ中へ、寄贈本を送り込まないと意味がないと考えた。それが第２回目の呼びかけ・調査となった。即ち「本を読むという行為は、本に描かれた世界を骨子として、読者の知識・体験・感情などを交え、読者自身の世界を展開する精神行為だと言われています。同じ本を年齢を違えて読むと、感じ方・読み方が異なると言われるのは、その実例でしょう。今回の震災を体験した子どもたちも、体験前と異なった読みを展開するはずです。読む行為を通して、自分の人生観・物の見方・読み方の中に、この貴重な体験を据えてくれることでしょう。

今こそ、この体験が生々しく生き続けている今こそ、図書に関わる私たちは「読み聞かせ」「ブックトーク」などを通して、子どもたちを本の世界に誘う活動をし、この体験を生かす働きをすべきではないでしょうか。

楽しいイベントで震災を忘れることも、こころの傷を癒す一つの方法でしょうが、この体験をバネに、より確かな生き方を創造する精神行為としての読書の重要性、その意味を子どもたちのそばに居て、図書に関わっている人が認め、行動しない限り、誰がするのでしょう。ボランティアの人たちもやがて居なくなります。

しつこいようですが、今こそ、この体験を子どもたちの心の支えにするために、読書活動を推進して下さいますようお願いいたします。

なお、この震災の時に図書館に関わる者は、何をすべきか、また何をしたかこれから何をしようと考えているか等、ご意見・ご報告をお聞かせくださいますようお願いします。」と。

子どもたちの心が求めているとき、どのように困難であっても、本を子どもたちに提供する。子どもたちは無自覚であるから、教師がその心を察知する事が大切だ。

学校図書館とは生徒が中心にあって、教師が子どもたちに働きかけ、子どもたちと共に教師も学んでいくものだと思う。

(4) 寄贈対象校の選定のために

日本児童図書出版協会の呼びかけに応じて集まった本は４万冊以上にのぼるという。小峰協会会長、笠原全国SLA事務局長のお供をして、兵庫県庁へ義務教育課、高校教育課、神戸市教委指導第一課に赴き、この運動を説明・協力を求めた。

席上、寄贈対象校決定に対しては、小・中各図書館教育研究部会長を通すように！との助言もあり、当日部会長の都合により後日訪問となった。中学校部会長へは電話で失礼さ

せて頂いた。選定基準は小学校長会の資料を参考にさせてもらった。

なお、西宮市・芦屋市については、3月1日現在で自校以外で授業している2校を加えることとした。

(5) 呼びかけ・調査を通して求めるものは

呼びかけは、できる限り多くの教師に気づいてもらいたかった。読まずに捨てられるには忍びない。調査を通して自分の図書館のことを考えてもらおう、それなら捨てられることもあるまい。答えることで自分を見、活動計画を練ってもらおう。

報告をすることで連帯を図ってもらおう。「子どものために！」と呼びかけることで、子どもを中心に据えた図書館経営を練ってもらおう。……想いが膨らんで止まらなかった。

表5　図書館活動の可否とその内容（月は開館予定月・開館中とその内容）

3月	4月	5月	6月	未定	開館中	貸出し	授業	課題	読み聞かせ	その他
5	8	1	1	30	78校	49	56	24	36	6
45校										

4．図書館担当者は何を考え、どのように行動したか

神戸市は専任の学校司書が全く配置されていない図書館教育行政の後進都市である。全く行政的に軽視されていると思える図書館の担当者は、この災害時に何を考え、何をしようとしたかを報告したい。それも、何百人もの避難者を迎え、その対応に追われながら、毎日が未体験の連続であった。そのような日々の中で、である。

(1) 午前中授業・一斉下校の中で

授業が午前中で一斉下校の中で「図書委員会活動ができるまで開館できない」（北区小）とか「貸出し活動は行ってません」（西区小）といった報告があった。

その一方で、同じ状況を理由として、「ST後20分程度の開館しかできない」（西区中）「20分休みのときに図書館を開放して貸し出しています」（北区小）「貸出しは放課後20分～30分のみの開館しか出来ていません」（須磨区中）と、何とか活動をしている人がいる。さらに「授業が午前中ですので午後は本を読むよう呼び掛けている」（北区中）「家庭内で毎日毎日本を読ませています」（西区小）「放課後時間がいっぱいあるので、本を読む機会として活動しています」（西区小）など心強い報告にあふれていた。

中に、「学校が開かれるまで本を貸し出していた」（長田区小）との報告は、胸打つものがあった。

(2) 避難所になり図書館へ入れない中で

図書館が、避難所となり、寝起きの場所や倉庫・本部・会議所といったことに使用され図書館に入ることすらできない中で、「いつ活動できるか目処が立たない」（長田区中）とか「取り出すことも、出した本を置くところもありません」（兵庫区小）といった報告はもっともなことであるが、他方では「他の部屋に図書を置き〝出前図書館〟を委員がしています」（兵庫区小）とか「学級文庫として各クラス20冊持ち出しています」（兵庫区中）「辞書類だけ持ち出して授業に使用しています」（東灘区中）。西宮市の小学校からも「現在、約300人の方が避難されております。図書館活動は無理があるため、来年度からと思っています。本は移動して、各学年に必要なものを各部所に用意しています」といった報告がある。更に続けると、図書館に入れないので「数少ない学級文庫を利用しています」（長田区小）「低学年図書室へ高学年図書室の本を1300冊持ち込んで2月13日から開館しています」（東灘区小）といった報告もある。どのような状況に置かれても、図書館を通しての教育活動をしようとする姿勢を持つこと。生徒の置かれた状況に応じて、働きかけを続ける意味と目標と意志をこのように持っている。

(3) 整理不十分の中で

「整理不十分なので開館できません」（灘区中・西区中）といった報告と一緒に、「倒れた書棚を起こし、31日から開館しました」（西区中）とか「ボランティアの方に手伝って頂いて、いち早く学習の場として、整備し、自主学習の場所にしております」（長田区中）といった声がある。

散乱した図書を整理している中で「あれ！こんな本があったのか！」といった発見が私にはあった。未整理の中で、床に並べた状態で「貸出しをします！」と呼びかけた私には、未整理の中での貸出しは、それなりに意味があると思う。図書館にある本との新しい出会いのチャンスは、このような時以外はあまり訪れることがないだろう。

(4) 読み聞かせについて

「読み聞かせ」の呼びかけに対しては、「『読み聞かせ』を有効に行っていきたい」（長田区小）「『読み聞かせ』はこれからも続けていきます。力になれることをしたいです」（垂水区小）、「他校で午後から授業しているので、数冊持って読み聞かせをしています」（垂水区小）、「読み聞かせの工夫をしています」（長田区北区垂水区）等々の実践報告があった。

呼びかける人がいれば、確実に答えてくれる人がいることは限り無く心強い。私たちの仲間は信頼できることを確認した。

(5) まとめとして

あくまでも、各教師が各学校で置かれた事情によって図書館活動の有無・その程度は異なってくるのは当然である。これらの事情を考慮しても、午前授業で一斉下校。避難所となり部屋にも入れない。散乱した本の整理ができない。といった幾つかの困難に直面しながら、それでもなお、否、それだからこそ活動しなくてはといった意気込みが多々読み取れるのである。

加えて、「温かいお心づかいありがとうございます」（西区小）とか「御苦労様です、ご自愛のほどを！」（中央区小）「あたたかいお言葉ありがとうございました」（須磨区中）という、励ましや感謝のことばが、呼びかけへの賛同や納得を漂わせていて、うれしかった。

5．災害時に学校図書館を守るものは何か

学校図書館とは何か、建物とその施設・設備を指すのではないはずだ。学校図書館の発足期には、廊下の一角でも図書室として活動した。人がいて、その人が子どもたちと触れ合って本の世界に誘うのが学校図書館だと思う。

もちろん、建物は安全であるべきだと思う。書架も展示架も地震を、災害を想定した対策が施されねばならない。少なくとも、この震災以後はすべての学校でそうあるべきだと思う。昼間の、生徒が多くいた時間をも想定するとその必要性は強い。

(1) 読書の意味をしっかりと確認しておけば……

子どもの心を癒すには、母がわが子に最初の本を「読み聞かせ」るような、読書の原点に立つべきだ。そして、読書するという行為の意味内容（想像・思いやる・心を支える・そして、生きる力を育む）を明確に押さえておかなくてはならない。読書が子どもの生き方に関わっていることを、しっかりと認識しておけば、それが災害時の図書館活動を続ける力となるであろう。

(2) 図書館の理念を明確に持っておけば……

かつて、イギリスで公共図書館設立に反対した人たちは「民衆が反乱を起こす」と言ったといわれる。本は、その人の人生観、世界観、その人の生き方をかえる。だからこそ、本は一階級の所有物ではなく、すべての人び

とに開かれたものであるべきなのだ。

学校図書館はあくまでも児童生徒の教育と関わるものであるが、児童生徒の後ろにいる大人たちにも開放してしかるべきだと考えるがどうだろう。

もっと積極的な交流があれば、図書館への理解をもっと深める要因を作ることができたのではあるまいか。

(3) 仲間の連帯が図られておれば……

平常時の連帯はもちろんだが、この災害時こそ普段以上に仲間の活動状況を知ることが励みとなると思われる。二度目の呼びかけに対する報告の力強さは、その証のように思われる。

可能ならば、災害時の今、何を読み聞かせればよいか、といった情報交換や、図書の担当者としてボランティアの要請が行われるなど、目的のはっきりした情報の交換があれば求める人を満足させられたであろうし、そのことが図書館を守る力となるであろう。

(4) 図書館人としての自覚と行動が保障されていれば……

自分の学校で、直接図書館で子どもたちと、図書を介して関わっているのは自分なのだといった自覚。図書の立場で考えるのはまず自分であるべきだという覚悟。「一人でやっています」(西区中) もよいが、「新年度から図書室として使用できそうですが、それも本校職員の全員作業で間に合いそうです」(須磨区中) といった全職員と共に行動したい。しかし、言い出すのは自分なのだといった行動がほしい。

＜全国ＳＬＡの刊行物＞
●全国で活躍する学校司書の実践集
こんなにイキイキ
学校図書館
――学校司書の教育活動――
Ａ５判・182ページ・定価1,900円(税込)

「防災指令３号」が出され、教職員は休日無しで非常事態に対応する、教員は生徒と教育現場の事態に対処するのだが……。この時図書に関わる者が図書に専念できたであろうか。その保障はどうすれば得られるのだろうか。

(5) 呼びかけ統率する組織がしっかりしておれば……

教師も被災校へ毎日のようにボランティアとして、他校の救援物資の仕分けをし続けたという。そこで、教師としての経験や知識を生かすことができたであろうか。医師に解体作業をさせることが考えられないように。教師に子どもたちの心の傷を癒すボランティアがなぜ成立しなかったのだろうか。見識を持った組織の必要性を感じる。

「司書配置の早期実現を望みます。早く図書館を使えるようにしたいと思うのですが厳しいです。読み聞かせは各学級で実施している」(灘区小)。「ショーケース、背の高い木製本箱、椅子が破損しました。貸出しは放課後20～30分のみ開館。週３日、図書館の手伝いを11月からして下さった方が震災まで居ました。とても助かりました。今後早く司書専任の方をお願いしたい」(須磨区中)「専任の司書教諭配置か専任の係教師の配置が今後の課題だと思います」(垂水区中)、「……学級事務に手をとられはかどりません。専任の司書教諭の設置が望まれます」(東灘区小) といった声は、熱心に取り組む姿勢を持っている人に強くある。一人では背負いきれない重さをひしひしと感じられたのではあるまいか。図書館担当者が猫の目のように変わるようでは……、と思う。

兵庫県南部地震に会って、その中で精一杯がんばってみて、学校図書館は先ず「人」だと、多くの仲間が身に染みて感じたのではなかろうか。(たなか・まさる＝兵庫県神戸市立神港高等学校講師・兵庫県学校図書館協議会事務局長)

学校図書館の危機管理計画に阪神大震災をどう生かすか

学校救済センター構想の提案のなかで

佐野友彦

1．部屋が平行四辺形になる
　生活のなかでの震度７
　陽が昇って明るくなって
　まず火を消して、机の下に潜る
2．図書館危機管理計画を策定する
　危機管理計画の内容
　危機の大きさの設定
　危機の来襲時刻の想定
　瞬時に身を守るノウハウ
　危機管理計画の立案と実行
　危機管理計画の作成期限
3．図書館にいる児童生徒の安全対策
　初動のときは児童生徒を救えない
　事故発生のときの救出
　避難した図書館利用者はだれか
　気をつけて帰宅する、でよいか
4．図書館の施設設備を守る
　考えられない損傷が起こる
　書架の転倒防止の具体的な提案
5．学校を災害武装する
　学校を救済センターにする
　救済センターの組織と運営
　救済センターとしての学校と図書館
　災害は忘れずにやってくる

1．部屋が平行四辺形になる

生活のなかでの震度７

後述する対策とも関連するので、まず震度７の地震とはどのようなものか私の恐怖の体験を述べてみたい。いまさら体験談を聞かなくても、科学的にいくらでも追体験もできるし、情報としてデータを得ることもできるわけだが、それはあくまで疑似体験であり、冷たい資料であって、生活のなかでの震度７ではない。生活のなかではどんなものだったのか、まず知ってもらいたいと思う。

そのとき、私は半起半眠状態でベッドにあった。電気スタンドをつけて、雑誌を読んでいた。突然何の予告もなしに、いきなりボンと体がほうりあげられた。「何に？」と思う間もなく、ゴオーッという風音でもなし、地鳴りでもなし、不気味な音とともに激しい左右動がきた。直ちに停電。あとは真っ暗のなか、揺さぶられていた。この段階ではじめて「ウワッすごい地震」と自覚をした。実際には停電するまで４～５秒くらい時間があったのではないだろうか。その間、左右に揺れて四角い部屋が平行四辺形になるのをハッキリ見た。あとは真っ暗ななか、動きもとれずじっとしていた。ベッドの上に、書架の本という本が降り注いできた。飾り物やステレオセット、ブロンズ像も落ちてきた。が、そのときは何も感じなかった。ようやく治まって、枕元に備えておいた懐中電灯や携帯ラジオを手探りで探した。しかし、どこにもなかった。偶然に、広告マッチに手が触れた。マッチをすって懐中電灯を探した。いくら探しても見つからない。また、マッチをすった。枕元から三メートルも離れた部屋のとんでもない隅にこ

ろがっていた。ようやく明かりをつけ、洋服をきて、火災に備えて外に出た。「備えあれば憂いなし」とは教えられたが、これではいざというときに、まったく役にたたない。現在は、これにこりて枕の下に敷いて寝ている。作品『照柿』で有名な高村薫氏は、「恐怖が心に穴をあけた」と題してその情景を述べている。氏は大阪に在住だが、道路一本隔てて難を逃れ、正確には行政の言う被災者ではないと断りながら、「自分はベッドに正座して何を思っていたのか、記憶にない。そして、家がメキメキバリバリと音を立て始めたとき、〝きゃあ〟という叫びが出たのだが、それも絶叫ではなく、むしろ弱々しいものだった。」「わたしはただ〝死ぬ〟という直感をもった瞬間、〝きゃあ〟と力ない声をあげたのだ」とその恐怖を述べている。佐々木薫教授（関西学院大学）は、「洋箪笥の前に寝ていた妻の安否がまず気になった。洋箪笥は倒れる瞬間に戸が開き、その中へすっぽり彼女を抱き込む形になったため奇跡的に助かった」と述べている。こんな事態があらゆるところで起こったのである。

陽が昇って明るくなって

飛び出して、寒空に震えているうちに、陽が昇ってきた。あたりが明るくなってきた。その割に被害もないわいと思って、ひょいと向かいのアパートの屋根を見て驚いた。屋根の棟から中程まで瓦がすっかりズリ落ちて、屋根の板が見えているではないか。ほかの家はと思って見ると、はす向かいの家も、後ろ隣りの家も瓦がズリ落ちてしまっている。通りに出てみると、ブロック塀が軒並み倒れている。マンションのテラスが剝げ落ちて道路に倒れかかっている。二階屋の一階が潰れて平屋になってしまっている。我が家はと思ったが、自分の家の屋根は自分の庭からでは見えない。少し離れたところまで歩いて行って屋根を見た。どうやら大丈夫らしい。安普請の２×４の既製住宅であったため、屋根はスレートで、壁体で持たせる構造であったのが幸いした。塀もブロックでなく、フェンスにしたのがラッキーだった。

家のなかに入って驚いた。戸棚の戸がすべて全開して、中身が散乱していた。それこそ足のふみばもない。家のなかで靴をはくようだ。開き戸はとくに悪かった。仏さまも位牌も飛び出している。ヤカンも鍋も醤油も花瓶も油も、菓子皿も洗剤も床の上に散乱している。それこそ満漢全席である。食器棚はとくに悲惨だった。ガラスのコップもワイングラスもコーヒー茶碗も和食器も洋食器もすべて飛び出していた。皮肉なことに、僅かに残ったのは景品で貰った食器類で、思い出のウエッジウッドもジノリも木っ端微塵であった。自分の部屋に入って驚いた。寝ていたベッドのフトンの上には、本はもとよりブロンズ像もこけし人形もその上にあった。ブロンズ像など頭の上に落ちていたら、イチコロだった。ステレオセットも落ちていたが腹の上だった。動転していたからか、重いとも思わなかった。書架に入れていたもの、上に置いていたものが全部落下した。ワープロのディスプレイも前に飛び出して僅かにコードでぶら下がっていた。テレビも倒れていた。地震前から調子が悪いので往診を依頼していたワープロのサービスマンが、地震の翌々日にひょっこり訪ねてきてくれた。「どこも悪くありません。それでも出張料だけは貰わなければなりません」と気の毒そうに請求書を置いて帰っていった。蹴飛ばしたら直った口で、とんだ地震の副産物であった。

洋タンスの引き出しが10センチ程すべて開いていたのは気持ちが悪い。部屋がなんとなしに狭くなったと思ったら、倒れなかった戸棚やタンスが40センチ程前進している。なんとも不思議なことだった。あとで押し戻そうとしたが、引き出しを抜かないととても重くて戻せなかった。

まず火を消して、机の下に潜る

小さい頃から教えられていた「まず火を消して、机の下に潜る」というのは、いったいだれが決めたマニュアルなのだろう。大嘘もいいところだ。とても火のところまで行けるものではない。じっと身をかがめていることすら不可能な状態だ。幾度となく放映されたので周知の画面となったが、NHK神戸支局執務室のあの場面のとおりである。あの揺れの激しさである。

最初にガンときた上下動の一撃などは、なにがなんだかわからなかった。地震だという意識はなかった。当地では「トラックが家に飛び込んできたと思った」と感想をもらす人が多かった。５階部分がつぶれたため、たびたびテレビ出演して有名になった神戸市立西市民病院では、この一撃でこの階に臥せていた病人がベッドからほうり出されて床に落ちたというのである。そのために、つぶれて落ちてきた天井をベッドが支え、ベッドとベッドの隙間にいた病人は助かったのだという。直下型地震とはこういうものだ。まさにあっという間もない。最初の縦揺れの一撃から、激しい横揺れになり、それが静まるまで、この間僅か17秒であったというのである。この一瞬に、150万都市が崩壊したというのがおおげさならば、都市機能のすべてを喪失したのである。

地震が発生したのは、１月17日午前５時46分であった。この時間帯では、大部分の市民はまだ床にあった。厳密な意味では生活時間帯、活動時間帯ではなかった。あと１時間遅れていれば、新幹線もJRも私鉄も走っていた。満員の通勤電車も走っていた。２時間遅ければ、児童生徒は登校していたに違いない。こう考えると、この程度の被害などは、まったく軽微な被害だったと感謝する気持ちにさえなる。これから、実際に対策を策定するにあたっては、こんな僥倖（ぎょうこう）な時間帯に地震が発生するという条件を設定してはなるまい。

２．図書館危機管理計画を策定する

危機管理計画の内容

阪神大震災の教訓を生かすにはどうすればよいのか。二度とこんな被害を受けないためにはどうしたらよいのか。その具体的な方法として、何はともかく危機管理計画をたてることであると言われている。計画ができたらそれに従って対策を実行していくのである。これは保険をかけることに似ている。何も起きなければ対策をたてたり、そのためにお金を使うことは無駄のように思える。しかし、今度のように被害が出てから、これを復旧するとなると、まさに気が遠くなるほどの出費である。個人にしても、学校にしても、図書館にしても同じである。事前に補強したり、固定したり、用具を調えたり、脱出を考えたり、救助法を考えたりすることなどは安いものである。それでも物損の場合は、お金をだせば戻ることもあるが、児童生徒の生命となると金銭には代えられないこととなる。

学校図書館の危機管理計画は、いうまでもなく学校の危機管理計画の一環として策定されなければならないことは言うまでもない。しかし、ここでは必要に応じて学校の危機管理計画に触れながらも主として学校図書館の危機管理計画について述べることにしたい。学校図書館の危機管理計画は、三つの面が策定されなければならないであろう。その第一は、児童生徒の避難、脱出など図書館を利用しているときに災害が発生したら図書館は利用者に対してどのように対処したらよいのかということである。図書館利用者の生命にかかわって、事故を防ぎ、安全に避難する方法の確立ということがその内容となろう。第二は図書館の物的損傷を未然に防ぐということである。図書館の施設・設備・器具・備品を

災害から守るということである。損害を最小限にとどめるということである。このことは、第一の生命身体を守るということと密接な関係のある場合もある。例えば、書架の転倒を防ぐ装置をつけるといったことは、書架の損傷を守るということと、利用者の身体の危険を避けるということにつながることでもある。第三の内容としては、その対策をだれが責任をもって実施することなのか、だれが所管して実施することなのかを明確にすることである。この実行責任が明確でないと、どのように計画がたてられていても、計画は絵にかいた餅で、机上プランに過ぎなくなる。

危機の大きさの設定

計画を立てるときに、危機をどの程度と考えるか、危機の大きさをどう想定するかは、極めて大切な要件となる。それは、想定される危機の大きさによって、出される答えはまるで違ってくるからである。関西は、もともと地震はないことになっていた。専ら災害対策といえば、風水害対策であった。今回は構えた方角とまるで違った角度から不意打ちを受けたのだ。いうならば東を向いて構えていたのに、西から背面攻撃を受けたようなものである。だから、某市の地震対策は、市全体でポリバケツ40個を用意してあっただけという。現在になって、市の防災対策はけしからんと指弾されているが、もともと地震はないという設定であるとすれば止むを得ないことであった。

危機管理対策を立てるにあたって、それがどのような大きさの規模で、それはなんであるかを想定することが第一の問題になってくる。災害はなにか、風水害か、津波か、火災か、地震か、どの対策をたてようとするのか。そしてその災害は、どのくらいの大きさのものを想定するのか。多くの場合、地震対策は他の災害対策をカバーするから、まず地震対策をたてることが先決になる。日本列島は、すべて地震列島といわれる昨今では、地震対策が優先ということになるのであろうか。そこで、今回の阪神大地震程度の震度を予想するのか、もっと震度の低い状況を予想するのかが検討されるわけだが、状況設定が甘ければ、導かれる回答も甘いことになるのは当然である。やはり、今回の震度程度は設定する必要があるのではないか。極端に言うならば、震度6震度5と、震度7とはまるで恐ろしさが違うということなのである。震度5以下ならば、何もこれという対策はなくてもよい。

1月17日以降も当地は震度4とか、震度3といった余震に見舞われている。事実、この程度だと「ウヌッ地震？」とは思うし、落ちかけた瓦がさらに落ちてこないかと心配はするが、「この程度なら大丈夫」と落ち着いたものだ。逃げる心配などさらさら考えない。棚のコケシ人形が若干横を向く程度だ。こんな状況を想定して対策を立てるから、ポリバケツ40個の対策になるのである。悪い条件を想定するのでなければ、対策にならない。

危機の来襲時刻の想定

地震が一日のうちで、何時に発生するか。早朝とか、夕刻とか、午前9時頃とか、発生時間をどう捕らえるかは、危機管理を策定する場合の重要な要素となる。やはりこれも最悪の時間に起きることを想定したい。担任の教師が必ずいて、生徒が黒板に向かって勉強しているときに、学校の災害は起きることになっているが、こんな甘い想定は難度1の避難訓練のパターンである。熱いスープを給食室から運んでいるとき、スープを食器に盛っている給食時間に、校庭で各学年の生徒が入り交じって自由に遊んでいる昼休みに、クラブ活動に励んでいるときに、教師の出張が重なって自習の学級が多数あるときに、つまり学校が弱点をさらしているときに危機が襲ってきたらどうするかと考えて、計画を立てることである。

学校図書館においても悪い条件を考えて計画を立てることである。特定した生徒でなく自習や空き時間の学級の生徒が随意に利用しているとき、雨の日の昼食休みのとき、放課後の利用のとき、課題解決のため幾つかの学級のグループの児童だけで利用しているときといったように、掌握困難な利用の状態のときを想定することである。決して、ある学級の生徒全員が、担任教師に引率されて、図書館利用をしているときといった都合のよい条件を設定して考えないことである。難度2、難度3の場合を想定して計画を立てることである。

瞬時に身を守るノウハウ

地震はきわめて短時間の内に、発生して終結するということである。いうなれば瞬間に決まるという特徴を踏まえて対策を立てることである。今回の阪神の大地震は、地震が発生してから揺れが終わるまで、僅か17秒であった。これですべての勝負が決まったのである。洪水も火災も短時間で襲ってくるが、それにしても17秒ということはないであろう。しかもそれが予告なしにくるという始末の悪い襲いかたをすることである。だから、地震対策は、この瞬間に身を守ること、小康状態となったら脱出をどう図るかが課題となる。しかも前日から雨が降り続いたとか、消防車のサイレンが近くで鳴ったといった予告のまったくない、不意打ち状態でくることである。これでは、指導者が例え近くにいても「机の下に入りなさい」と叫ぶ間もない瞬間である。これは、過酷な上にも過酷な条件である。このためには、他の災害対策にはない対策を講ずる必要がある。

危機管理計画の立案と実行

計画を立てたら直ちに実行に移すことである。避難脱出といった面の計画は、やる気がありさえすれば、すぐにでも実行できることである。別に、経費も必要のないことである。それは、演習であるとともに訓練であり、シュミレーションなのである。実際に演習をしてみて計画の甘いところは修正し、演習から計画を見直す教訓を得るのだ。

当地でも今日になって、某市は防災計画を立てるにあたって、1市だけで計画してみても効果が期待できないので、近隣3市連合で防災計画をたて、それによって演習をすることが最もよいというので、1市ではなにもしなかったということである。まさに計画だおれの見本のような話である。これでは意味がない。要するに役人の頭の中だけに計画があった、いや言い訳があったのである。役人のやることだと言われないようにすることだ。学校はなんといっても対象が紙ではない。生きている人間が相手なのだ。計画を立てたら早速実行してみることである。

図書館の施設設備、器具備品を震災の損傷から守るということについては、多少とも経費のかかることである。これについては、見積もりを至急たてて、予算化することである。一度に、計画を実行することが不可能ならば、年次計画として第1年次は櫛形配列書架を固定する、第2年次は壁面書架を固定する。第3年次はパーティションを固定するといったように、先が見えるように計画を具体化することである。実際には、市当局や町当局と学校とが折衝して具体化することになるわけであるが、いざ災害に会ってなぜそんな危険なことを放置して置いたのか、といった段階になったときに、学校からこうして欲しいという要請もなかったと言われないようにすることである。できたら、文書の形で一日も早く手当して欲しいという要請をしておくことである。これは、直接には校長の責任であり、事務職員の責任ではあるが、その人たちにしても実務の担当者からそのような要望がなければ、そのような措置をする必要が図書館にあったことなど理解できないことである。

危機管理計画の作成期限

危機管理計画をいつまでに作成したらよいのであろうか。計画をたてるにあたって、本当に地震がくるのだろうか、くるとしたらいつ頃くるのであろうか、どうしても知りたくなってくる。これによって対策のたてようもあるからである。今回の阪神大地震にしても、これがわかっていれば、ずいぶん楽なものになっていたに違いない。懸命に努力されている学者には申し訳ないが、地震の予知はまだ不可能といってよい。今にして思えば、朝焼けが異常だった、瀬戸内の海の色がおかしかった、有馬温泉の湯の湧出量が変化していたといった話はたくさんある。「以前から阪神に地震がくると心配していた」といった地震学者の話も多い。残念ながら、これらはすべて地震が発生してからの話だ。いま当地では活断層がどうの、フィリピン海プレートが、野島断層や諏訪山断層がどうのと、阪神地震のメカニズムを説明してくれる俄か地震学者も少なくない。

『毎日新聞』('95.2.18) は、「届かなかった学者の警告」という見出しのもとに、'93年10月に開催された日本地震学会で、中田高助教授 (広島大学) が「〝京阪神地区には活発な活断層が多い。地震が起これば甚大な被害が出る〟と警告したが、耳を傾けた自治体はなかった。」という記事を掲載している。この論法でいくと、自治体は地震学会に限らず、あらゆる学会や研究会の会議内容やその成果に目を見張っていなければ落ち度ということになる。もし、この中田助教授の発表が地震学会として重要な発言と考えるならば、学会の決議として、京阪神地区の自治体に警告書を送付するなどすべきである。このような具体的な行動があったにもかかわらず、自治体が耳を傾けなかったというなら、怠慢であったとそしられてもいたしかたない。私にして言わしむれば、あまりにも学者に味方した記事で、本当は「届けなかった学者の警告」と書かれるべきであった。

さらに、『毎日新聞』はこの阪神大震災検証特集の記事のなかで、室崎益輝教授 (神戸大学) が、自ら神戸市の防災会議専門委員をしていながら「震度5の防災計画を黙認してしまった」と1月31日滋賀県主催の防災講演会の席上で号泣したことを伝えている。これこそが真実であり、痛恨であった学者の良心というものではないか。これまで、94年12月三陸はるか沖、94年10月北海道東方沖、93年7月北海道南西沖、93年1月釧路沖といずれの地震も残念ながら予知されていない。とすれば、危機管理計画をいつまでにたてればよいのか、という課題の正解は「今すぐに」という以外にはないのではなかろうか。不十分な計画でもまず計画をたて、時間が稼げるなら、順次少しずつ改訂をしていくというのが、もっともまじめな解答ではないだろうか。

3．図書館にいる児童生徒の安全対策

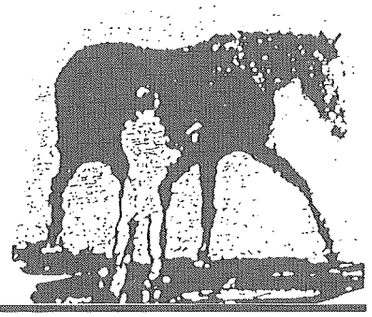
初動のときは児童生徒を救えない

危機管理計画の策定にあたって、児童生徒の生命を守ることがすべてに優先して考えられなければならないことはだれしも異論はない。しかし、このことは口で言うほど簡単なことではない。グラッときたら「まず火を消して、机の下に潜る」というマニュアルでは、人命は救えない。第一、火のところまで歩いて行くことなど不可能だ。机の下に潜ることも、机に向かっているときなら出来るかも知れないが、体育館にいたり、廊下をあるいているときにはどうするのか、とても机を探してその下に潜りに行くことなどはできはしない。図書館に児童生徒がきているとしよう。今回のような地震が予告もなく不意にドーンときたら、実際は「机の下に入りなさい！」と教師や司書が大声で叫ぶ暇もない。まったく瞬間といってよいからだ。このことは、「初

童心社がおくる

最新刊 絵本・図書

版画＊池田良二「馬を洗って…」より



松谷みよ子 むかしばなし　幼児～

したきりすずめ　4月上旬刊行！

文・松谷みよ子　画・片山 健

おじいさんが畑からつれかえったすずめの舌を、おばあさんが切ってしまう。野こえ山こえ、土のだんごを食い、牛の洗いじるを飲み、おじいさんは、すずめのおやどを探しにいった。リズミカルな語りと迫力満点の絵！

A4変型判／32ページ　定価1,450円(本体1,408円)

若い人の絵本　小学高学年～

馬を洗って…　4月下旬刊行！

文・加藤多一　版画・池田良二

ふぶきの夜に生まれた〈三本白〉の馬ソンキとたった一人の兄の交流。〈三本白〉の馬は飼い主に不幸をもたらすと、父はソンキを疎む。折りしも、兄は出征で戦地へ旅立つが…。問題作に重厚なエッチングを添えた絵本。

B5変型判／56ページ　定価1,300円(本体1,262円)

民話の手帖　一般

戦争と民話　4月下旬刊行！

責任編集・望月新三郎／松谷みよ子

私たち日本人は、戦争をどう伝え、戦後をどう語ってきたのだろうか？　戦後50年たつ今改めて民衆が語り続けてきた民話の視点から考える。木下順二、江藤文夫氏の対談・斉藤博之氏の死の影の兵士デッサンなど多彩。

B5判／80ページ　定価1,880円(本体1,825円)

イラスト＊片山 健「したきりすずめ」より

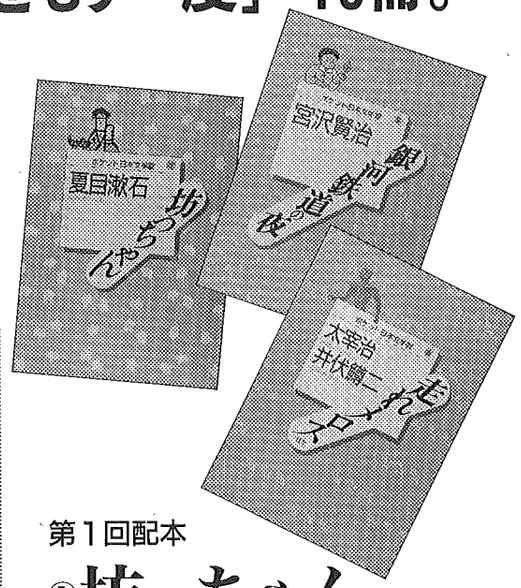
〒160 東京都新宿区三栄町22番地　TEL.03-3357-4181 FAX.03-3358-1078　童心社

創立15周年記念出版"フォア文庫マーブル版"好評刊行中！

フォア文庫　ハートにギ・ラ・リ！〈本の宝石〉フォア文庫　解説目録進呈!!

フォア文庫の会
岩崎書店/童心社
金の星社/理論社

大人から子どもまで「あの名作をもう一度」の16冊。



Pocket
ポケット日本文学館
《全16巻》

第1回配本
①坊っちゃん
夏目漱石
②銀河鉄道の夜
宮沢賢治
③走れメロスほか
太宰 治 井伏鱒二

[本シリーズの五大特長]
①作品のイメージが広がるカラーさし絵入り。
②むずかしい言葉には傍注で説明。
③作品の背景がよくわかる豊富なコラム。
④漢字はすべてルビつき。
⑤軽くて、読みやすいハンディ・サイズのB6判。

《全巻編成》

第1回配本（'95年4月刊行予定）
1 坊っちゃん 夏目漱石
2 銀河鉄道の夜 宮沢賢治
3 走れメロスほか 太宰 治 井伏鱒二

第2回配本（'95年5月刊行予定）
4 次郎物語 下村湖人
5 たけくらべ 樋口一葉 森 鷗外
6 トロッコ・鼻 芥川龍之介

第3回配本（'95年6月刊行予定）
7 吾輩は猫である(上) 夏目漱石
8 吾輩は猫である(下) 夏目漱石

第4回配本（'95年7月刊行予定）
10 赤いろうそくと人魚ほか 小川未明 浜田広介 坪田譲治

第5回配本（'95年8月刊行予定）
11 小僧の神様・一房の葡萄 志賀直哉 武者小路実篤 有島武郎
12 二十四の瞳 壺井 栄

第6回配本（'95年9月刊行予定）
13 野菊の墓ほか 島崎藤村 伊藤左千夫
14 しろばんば 井上 靖

第7回配本（'95年10月刊行予定）
9 ビルマの竪琴 竹山道雄
15 伊豆の踊子・風立ちぬ 川端康成 堀 辰雄
16 ごんぎつね・夕鶴 新美南吉 木下順二

講談社

動のときには子どもたちを救ってやることができない」という教訓をわれわれに示していることなのだ。

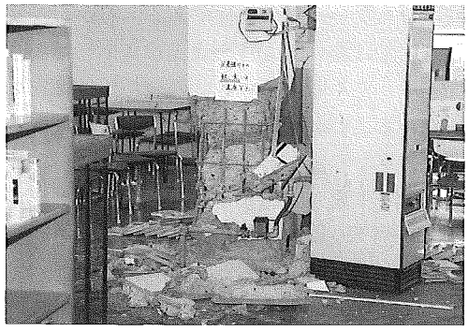
生命を守る危機管理の第一課は、子どもたち自身がまず自分ですばやく臨機応変に防御することを教えておくことである。そして、それは知識として教えるというだけでなく、体ですぐ反応できるように身についたものにする必要がある。つまり、ある程度訓練しておくことが肝要である。タレントの清水国明氏は、今回の地震の教訓として、「頭をかかえて丸くうずくまる〝ダンゴムシのポーズ〟をとる」ことを自分の子どもたちに教えているそうだ。氏が「ハィ！ダンゴムシ」と言うと、子どもたちが直ちにそのポーズを取るそうだが、なかなか実戦的なマニュアルである。頭を手で覆って衝撃から守ること、口の周りに空間をつくって窒息を免れること、心臓を高い位置にして万一の出血を最小にすること等々いくつもの教訓が生かされている。こういった実戦的なマニュアルを決めて、実際にすぐ反応できるように訓練をすることである。

事故発生のときの救出

万一、図書館内で事故が起こった場合の救出を考えておく必要がある。今回の震災では、死者5,400余名を出したが、その60パーセントは圧死である。焼死者が多いように考えられているが、焼死者は10パーセントであった。われわれの図書館から、書架の間に挟まれた、ビデオの下敷きになったという児童生徒を絶対に出さないようにするとともに、不幸にしてこのような事故が発生したときには、素手ではどうにも助けようがない。少なくも鉄パイプや大型バールのようなコジ開けたり、テコにしてずらしたりする道具が手近になくては救出は困難である。

今回の地震でもこういった道具さえあれば救い出せた人たちはたくさんあった。ガレキの下から、うめき声や助けてといっている声が聞こえているのに、助けられなかった人たちがたくさんあった。ジャッキやバールやカッターなどの恰好の道具がなかったからである。こんな教訓に学んで、図書館としても最低の危機対策として、こういった救出道具を備えておくことが重要である。特別の予算などと言わなくても、経費的には鉄パイプや大型バールは驚くほど安いものである。「少なくもわれわれが担当している図書館からは、ひとりの事故者も出さない」という心構えで臨みたいものである。

図書館の専門職だけあって、危機管理にあたっても専門的に対応がなされているという実践力と見識とを持ちたいものである。ただし、平時においてそれらの道具をどのように管理格納しておいて、しかもいざというときにすぐ取り出せるようにしておくか、なかなか頭の痛いことではある。



避難した図書館利用者はだれか

地震発生のとき、図書館を利用していたのは何人か、学年別にはどうか、男女別にはどうか。最終的には、個人名を把握するという児童生徒の掌握をどうするか。だれがどう助かったのか、把握するにはどうしたらよいのだろうか。

災害時にそれを知りたいために、平生の図書館利用のたびに学年や氏名を記帳しなければならないとか、入館するたびに身分証明書を預けるなどといった面倒なことにはしたくないものである。もちろん、セキュリティシ

ステムをとって入り口で閲覧券を入れてバーを押して入るようなシステムを採用しているところは問題ない。そうでないと、これはなかなか難題である。この稿を読まれた方でどなたか名案を出していただけないものだろうか。全員無事退避したか、まだ残されている生徒はいないか、書架の間はどうか、グループ研究室にはいないか、ＡＶルームにはいないか、ブラウジングルームはどうか、コンピュータの陰にはいなかったか、ついでに廊下を隔てた図書館の前の便所にはいなかったか。いくらこちらが動転していても、一人ひとりの児童生徒の安全確認を完全にすることは、危機管理の第一歩であり、絶対条件である。そしてそのとき無事脱出したのはだれかというのである。

このことは、もちろん図書館だけのことではない。学校全体としてもどうしてもしなければならない絶対の条件である。しかし容易なことではない。放課後地震が発生した状態など考えてみると、すでに帰宅した子どもたちがいる、校庭で遊んでいる子どもたちがいる、教室で掃除をしている子どもたちがいる、昇降口で下履きと履き換えている子どもたちがいる、クラブ活動をしている子どもたちがいる、これらの子どもたちをどのように掌握するのか。すでに研究会のため隣の学校に出張してしまった先生もいるなどと考えると、発狂しそうなほど大変なことである。そしてそれはおおまかなことで、アバウトでよいということは絶対に許されないことである。

気をつけて帰宅する、でよいか

避難できた子どもたちをどうするのかという問題である。これまでの学校の避難訓練では、校庭に避難してくれれば学級ごとに整列して、あと講評があって終わりだった。実戦では、「気をつけて帰宅しなさい」と、あとの責任を家庭に転嫁して終わりというわけにはいかないだろう。今回の地震は、幸い登校以前だったから、すべて家庭の責任で済んだ。学校の授業中だったらどうするのか。校庭に生徒を集めたまではよい。あの燃え上がる火の海のなかへ「さあ、おうちに帰りなさい」と帰宅させるのか。

校庭集合をもって終了といった単純なマニュアルで済まないことをも考えておかなければなるまい。最悪の条件を想定しておいて、そこまでしなくてよかったと、順次条件を緩和していくのが、このような危機管理マニュアルの常道だそうだが、いままでのマニュアルでは、はみ出た部分をも考えておくのが、これからのマニュアルであるかも知れない。場合によっては、児童生徒も教師もそのまま学校にくぎづけになる可能性も生じてくるであろう。このときには、もう電話も不通になっているに違いない。道路も分断されて、とても教師の自動車で送り届けることも不可能であろう。教師も自宅に連絡すらとれないに違いない。こういった最悪の事態をも想定しておくことが必要であることを今次の災害は教えている。

４．図書館の施設設備を守る

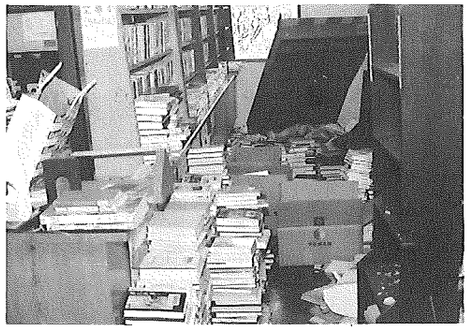
考えられない損傷が起こる

図書館における危機管理のつぎの問題は、図書館の施設・設備、備品・家具を災害から守ることである。備品や家具が破損したり、故障したりしないよう管理することである。公の財産を守ることであるとともに、このことは、これらの物品によって怪我をしたり、さらに人命を失ったりすることがないようにすることでもある。これら備品・家具・什器の類は、しっかり管理されないときは、人間に凶器となって向かってくることを十分に考えておくことである。

これらの物品がどのような損傷を受けたか、実際に小・中・高校図書館、大学図書館、公共図書館と10館以上も回ってみた。そのなかで一番損傷が大きく、かつ、危険と感じたのは、書架である。なかでも転倒による書架の破損である。歩いたなかでは、開架閲覧室の書架のすべてに転倒防止装置が施工されている図書館は１館もなかった。一部の書架には転倒防止の措置がされているという図書館は２館あった。関西には地震がないことになっていたというより、こんなに幅がある書架が倒れるとは思ってもみなかったというのが、異口同音の感想だった。今回は、幸い地震が早朝であった。どの図書館も閲覧時間でなかった。転倒した書架の下敷きになったという例はひとつもなかった。どの図書館からも事故者は出さなかった。これは地震対策がよかったのでなく、地震の発生時間が僥倖したのであることは言うまでもない。

実際には、考えられないことが起っている。神戸市立中央図書館のマイクロフィルム架は、何段かの引き出しからできている背の低いタンスのような書架である。寸法は、間口60センチメートル奥行き80センチメートル高さ90センチメートルほどの低書架である。この書架が前のめりに倒れているのである。こんなに安定のよさそうな家具が倒れるのである。地震の揺れとともに、引き出しがすべて滑り出して、重心が前に移動してきて倒れたのである。バーティカル・ファイルにあるようなオールロック装置がついていれば助かったかも知れない。それにしても通常なら考えられないことが起きるのである。安定のよい書架でこれであるから、一般の書架ではひとたまりもなかった。もっとも極端な傾斜低書架（図書が棚の前面から自然に奥に滑って入りそうな急傾斜の書架）は、図書がすべて飛び出しただけで、書架そのものの転倒は免れていた。あとは書架という書架が転倒したというのが一般的な状況であった。

集密書架も対震性が悪かった。どのメーカーのがよいということもなかった。電動も手動も悪かった。レールからの脱線、側板の捩



れ、起動装置部の破損などが主な故障であった。全部の書架を密集させてあればよいのかとも思ったが、その場合は両端部の書架が破損、間をあけている場合は間の部分の書架の損傷がひどかった。

書架の転倒防止の具体的な提案

兵庫県内の美術館も今回の地震で相当の被害を受けた。県立近代美術館、神戸市立博物館などは建物そのものがかなり被害を受けた。芦屋市立美術館、伊丹市立美術館、国立国際美術館、出光美術館などは、展示品に相当の被害があったという。美術評論家の乾由明氏によると国際的にも有名なロサンゼルス郊外のポールゲッティ美術館では、今次地震の直後、『緊急対策マニュアル』を２名の修復技術者とともに送ってきたそうである。そのマニュアルによると、作品の固定にはテグスをやめて鉄線を用いることなどが具体的に書かれているそうである。また、静岡県立美術館では、すでに東海地震に備えて、彫刻と台座、台座と床面とをすべてボルト固定して転倒防止をしていることなども注目を浴びているという。最近では、展示ケースの転倒防止にはなにが有効か、また、作品の台座をローラーの上につくる免震構造などが検討されていると同氏は報告している。美術館は、これまで盗難や火災には注意を払ってきたが、地震には無防備であったと反省されているそうである。このように、われわれの類縁機関では受けた災害をこれからの危機管理にどう生かす

かがすでに検討されている。われわれとしても被災経験を生かしてその対策を真剣に検討すべき段階にあるのではないか。

検討の第一は、書架の転倒防止である。単位書架の棚板一段あたりに収載される図書の積載荷重は、事典などの参考図書を除いて、通常約20キログラム程度である。７段書架とすると７倍で約140キロ、１連で約280キロ、それに書架自身の自重約50キロと計算すると、１連の書架転倒は、約320キロの物体が転倒する計算になる。これが櫛形配列されていて、一斉に横倒しになってその下敷きとなったら、とても助かるとは思われない。明石市大久保の大村奈々ちゃんは、幼児だが約50キロのテレビの下に寝ていて圧死している。地震のときは、家具はまさに凶器と化すことを思うと、わが図書館は凶器ばかりを備えているところといってよい。何としてもこの書架転倒だけは、防がなければならない。

今回の被災の実態から言うと、櫛形配列の書架では、床を固定しただけでは転倒防止の役に少しもたってなかった。壁面に沿って置かれている書架では、Ｌ字金具を何箇所かに付けて壁面に留める程度の防止方法では、壁からＬ字金具が引きちぎられて転倒防止には役立ちそうもない。天井とのツッパリ棒による耐震対策はなんの役にも立ちそうもない。ツッパリ棒は、一般家庭においても無いよりましというほどの役にも立たなかったと言われている。

そこで、具体的な転倒防止策であるが、櫛形配列の書架にあっては、相当厚みのある頑丈な一辺5センチ程度の鉄アングルを、180センチ間隔で留めることである。書架と書架の間だけを渡すのでなく、書架の天板部分を長いアングルで串刺し状にすべての書架を横断して連結するのである。ある大学図書館では、せっかくアングルを渡してあったが、薄く体裁のよいペナペナのアルミ製アングルであったため、アングルそのものがグニャっと曲がってしまって、転倒はしないまでも半転倒状態になっていた。地震後にこの曲がったアングルをはずさなければ書架を起こすことができなくて参ったそうである。壁面にたてかけの書架では、壁面と書架の天板部分とを、Ｌ字金具といったものでなく、やはり一辺5センチ程度の鉄アングルでしっかり固定することである。堅木の角材でもよいかも知れない。壁面と天板とを固定するとともに、壁面に接する部分の書架を押さえ付けて、壁面に接している天板部分が前に〝ノメッテ〟こないようにすることである。180センチあたり５箇所以上は留めたいし、壁面には少なくも４センチ程度は釘やボルトが入ってなければ意味がないだろう。これからは、これらのアングルを既製品として書架といっしょに売られる必要がある。こうなれば、書架と同じ塗装にもなって体裁もよいものになろう。

次に、書架の基部である。やはり床面としっかりボルトで固定することである。実際に現在売られている書架にもボルト取り付け穴があいているものが多い。しかし、これを利用していないのである。完全にボルト固定している図書館は実際には一館しかなかった。床面固定を行うと配列換えで書架を移動させたとき床面に痕跡が残って汚くなること、設置するときに業者まかせにしてあるため（図書館が発注者でないことが多いから）業者は床面に固定せず書架の組み立てが終ると帰ってしまうこと、図書館としてもここにボルト固定してよいというほど確定した書架の設置位置が決っていないことなどなどの理由があるからであろう。壁面に寄せている書架では、〝前ノメリ〟にならないよう、書架の前面の基部に木切れが詰めてあるというのが一般的な固定法であった。これは、固定法というより、床面が平面でないため、書架との間に隙が生じて、書架がガタガタして安定が悪いのを、隙を詰めて安定を図ったに過ぎないのである。この際、これを改めてボルト固定を実

新聞で調べよう 現代日本の50年

現代日本の50年編集委員会 編

1 昭和20年～29年 新憲法と戦後復興
2 昭和30年～39年 国際復帰と東京オリンピック
3 昭和40年～49年 高度成長と公害
4 昭和50年～59年 豊かさと国際関係
5 昭和60年～平成6年 昭和から平成

戦後の日本のできごとを新聞の紙面のかたちで再現！
1件1ページ、ルビつきで写真とともに歴史がわかる！

小学校上級から　A4判 各120頁 定価各3600円

〒104 東京都中央区銀座1-9-10　大日本図書　＊定価は税込 ☎03(3561)8679 FAX.03(3563)5596

てのり文庫 5社の会
●学習研究社●国土社●小峰書店
●大日本図書●評論社

てのり文庫　おやつにしようよ！
小林カツ代 著 定価630円

施することである。

また、櫛形配列をしている図書館で、複式書架を用いず、単式書架を背中合わせにしている場合には、二つの書架を至急に一つに固定することである。木製ならば帆立板を書架の内部から木ねじで留めることもできよう。スチール製ならば、熔接することも、穴を利用してボルトとナットで固定することもできるであろう。ともかく背中合わせの2本の書架を一体化することである。

書庫の書架については、この際棚板の前後を入れ換えるのはどうであろうか。棚板の背のL型になっている部分を前面にするのである。もともと図書は全面で揃えているので、このL字に折り曲げたストッパーは誤って奥につっこんだときに書架の奥に入ってしまわない役割しかないものである。これを前後反対にするのである。これだと、一銭の経費も伴わないで、飛び出し防止つきの書架にすることができる。もちろん、平生は少々本が出しにくいが、これは我慢するのである。これも将来は、棚板をU字形にすることも考えられよう。

以上の対策は、実際に被災した図書館を歩いてみて、被害の実態からこの程度の防災法をしないとだめなのではないかと感覚的に考えた対策である。負荷Gがどの方向にどのように作用した場合はどのように、といった科学的な根拠のあるものではない。本来ならば、地震体験車といった装置さえある時代なのだから、文部省なり国会図書館なりが経費負担して、実験用の図書館閲覧室をつくり、書架を並べ本を置いて、シュミレーションしてみるべきではないか。その結果、得られたデータを図書館界の共有の情報として、活用させてもらうといった実験がなされてよいのではないかとこの際提案しておこう。

ここでは、書架についてだけ述べたが、今回の震度ともなると思ってもみなかったものが転倒したり、動いたりする。食器がいっぱい入っていた棚や洋服ダンスが、そのまま40センチほど前進していたなど、今回の地震を体験した人がだれでもいうことである。わが家でも、大型テレビがいつの間にか壁を向いていた。ワープロのディスプレイは、コンピュータ・ラックからコードをつけたまま飛び出して僅かにコードでブラ下がっていた。洋服タンスは、完全に倒れていた。これに右にならうとすると、目録ケースは引き出しが飛び出して転倒、図書館の検索用コンピュータは机から落下、移動用のテレビ・ビデオセットも置台から落下するに違いない。事務室の書類棚の観音開き戸は全開して、なかのファイルや帳簿類は床上散乱を免れまい。壁にかけた額は落下し、ガラスはあたり一面に散乱、花瓶や植木鉢は痕跡なく飛散、事務室と閲覧室とを仕切ったパーティションは〝く〟の字にのたうっている。こんな情景が直ちに想像できる。

コンピュータについてさらにふれるならば、機械が飛び出すことと、ドーンときた瞬間に停電することを考えると、コンピュータ・ラックへの固定法を工夫すること、データのバックアップをマメにしておくことは必須のことと思える。自動的にホストコンピュータにバックアップがとれているような場合はよいが、スタンドアロン型(独立機能型)パソコンでは、ひと区切りしたらバックアップをとることを習慣化しておく。地震がおさまって、やれやれと思ったとたんに、入力したデータがすべて消えて、再入力しなければならないのでは泣いても泣き切れない。

5．学校を防災武装する

学校を救済センターにする

「被災地を取材して嬉しかったことは、焦土に学校だけが厳然と建っていたことだ。近時のファッションビルの何分の一にも満たない坪単価で建てられている安建築の学校だけが

“赤毛のアン”の故郷 モンゴメリの世界

アボンリーへの道(Ⅱ期)

全10巻／揃定価10,000円(税込)
●小学校高学年から●新書判

11冬の別れ
12パパの死
13のろわれたバイオリン
14いたずら天使
15はるか昔の恋
16二人の求婚者
17アレックに幹杯
18動かぬ証拠
19大女優がやってきた
20氷上の熱戦

〝赤毛のアン〟で有名なプリンス・エドワード島を舞台にくりひろげられる、少女セーラの成長の物語。ストーリーはますます佳境に、さまざまな人間ドラマを展開。

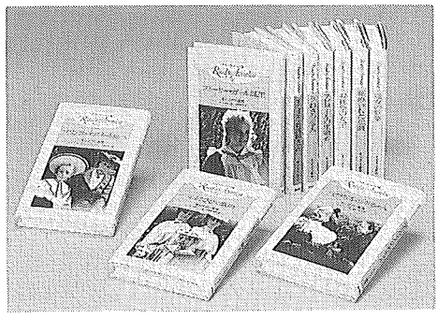
モンゴメリ原作
訳者・もきかずこ／広瀬美智子／平野卿子／清水奈緒子／光野多恵子／若林千鶴／村岡美枝

アボンリーへの道(Ⅰ期)好評発売中

全10巻／揃定価10,000円(税込)
●小学校高学年から●新書判

1プリンス・エドワード島へ
2ストーリー・ガール誕生
3すてきな看護婦さん
4うわさの恋人
5心にひびく歌声
6アビゲイルの求婚者
7アビゲイルの赤ちゃん
8魔女の妙薬
9収穫祭の女王
10秘められた悲劇

モンゴメリ原作
訳者・もきかずこ/平野卿子/広瀬美智子/村岡美枝/木本弥々/若林千鶴



金の星社 東京都台東区小島1-4-3 〒111
☎03-3861-1861 FAX03-3861-1507

(定価税込)

フォア文庫 ハートにキ・ラ・リ!(本の宝石)フォア文庫 解説目録進呈!!
フォア文庫の会
岩崎書店/童心社
金の星社/理論社

聳えているのだ。まさに教育の勝利と叫びたい思いであった」（『SLBC 会報』第75号）と私はその感動を書いた。今回の地震で、不思議と学校は強かった。特別に立派な工夫をしているわけではないが、20坪ごとに壁で区切られた落雁の箱のような構造をしているのが学校だが、きっとこれが幸いしたのであろう。

頼りになった学校をめざして、被災者は逃げ込んできた。この原稿執筆の時点で、すでに地震発生から１か月を越えているが、現在も被災者は学校に逃げ込んだままである。このような、状況を考えると、単に１日か２日雨露を凌ぐといったことではなく、ある程度の期間、相当の能力のある救済センターとしての機能を学校に持たせることを考えるべきではないか。

現在は、いざとなったら「この地区の避難所は○○学校」と指定があるだけで、学校にはそのための何かが用意されているというものではない。要するに、運動場があるだけ、体育館があるだけのことなのだ。少なくとも逃げ込んできた人が、１週間程度は籠城できるような救済センターとしての機能を積極的に付与すべきではないだろうか。

このような視点にたって考えてみると、今回の地震はいろいろな教訓を残している。せっかく、1,200名の給食室を持っていてもガス釜のためにガスがストップしては湯すら沸かせなかった。プロパンに切り替えられれば、大釜を探すことから始めなくても直ちに給食を開始することが出来た。簡単なベニヤ板やハニカムボードのパネルでも学校が持っていれば、通常は文化祭や学芸会の展示パネルとして使いながら、危急のときは大部屋の間仕切りにもなった。体育館に暖房が入っていたら、被災者はあんなに寒い思いをしなくてもよかった。教室の暖房もガスしか使えない暖房だったから、ガスが停止しては何の役にも立たなかった。屋上にタンクを持っていたら、水道がとまってもトイレは使えた。大型テントを持っていたら、運動会や学校行事に、地域のイベントに使いながら、いざという場合は食糧庫にも災害本部にも転用できた。シャワー室でもあれば、クラブ活動や夏期の体育のあとで生徒たちが毎日利用できだけでなく、危急のときは被災者用にも使えた。一歩すすめて、温水プールを設置していれば、学校では年間通して水泳を教育課程に取り入れることができるし、危急の場合は加熱して浴場にすることもできた。運動場に照明設備があれば、懐中電灯を頼りに仮設トイレに行かなくても済んだ。非常用倉庫が学校に併置されてあれば、そこに毛布や乾パン・水などの非常食、食器やヤカン、運搬具などの生活用品、怪我の消毒薬や添え木、消化薬や風邪薬などの医薬品が備蓄できた。食べ物がない、毛布がない、風邪をひいたと騒がなくても済んだ。学校の校庭などは、地下が大耐震水槽になっていて、その上が覆土されたグランドにでもなっていれば、消火するにも水がないといった惨めなことにならないで済んだ。ろ過して飲み水にすることもできた。学校を救済センターというだけでなく、防災センターとしても位置づけ災害に備えるべきではないだろうか。

学校を救済センター・避難センターにすることは、二つの意味から合理性のあることだと思う。第一は、公共の施設で、ある程度の人数が収容できて、市民が乗り物を使用しないで逃げ込める距離にある、こういった条件を満たす避難所は、今日学校をおいては見当たらない。市民の相当数が逃げ込める施設をいま改めてつくることも可能だが、建設には膨大な経費を必要とするであろうし、その土地すら都会地では見つけにくいであろう。もちろん、学校に新たな性格を付与するために現在のスペースでは不十分ならば、学校の隣接地なりを買収するのである。それでも遥かに安上がりで、実現可能のことではないか。第二は、今次のような災害となると行政担当者自身も被災者であって、自らが負傷し、家族が倒壊した家屋の下敷きになるといったトラブルにさえ見舞われて、動きがとれなくなることが容易に想定される。また、直ちに出勤して中央で避難や被災の指揮をとれといっても、交通も分断され、電話も不通となる状態では、幹部も職員も登庁することも、指揮をとることもできなくなってしまう。初動が遅いの、悪いのと非難の声も小さくないが、平生になんの用意もない上に、出勤すら困難な状況では、求めるほうが無理というものである。

そこで、最初の１週間くらいは、被災者や被災地が自立して、食糧も仮眠場所も情報も確保して、本格的な救援がされるまでの時間を稼ぐ工夫が必要なのである。それが救済センターである。現在は、戦時中のように日本国内どこにも物資がないというのではない。神戸の場合でも25分東上すれば、日本第２の都市大阪がある。西に30分行けば人口50万の姫路市があり、１時間西下すれば人口65万の岡山市がある。ほんのしばらく持ちこたえられば、なんとでもなるのである。

救済センターの組織と運営

学校を救済センターとするといっても、いざというときに学校長が駆けつけて指揮をとらなければならないような組織にしては役に立たない。学校という建物が、瞬間救済センターという別の機能をもった、別の組織に変身すると考えればよい。救済センターの長も運営の担当者も学校とはまったく関係がなく、完全に地域の人たちによってなされるのである。この人たちなら、災害が発生すれば間違いなくだれよりも早く、だれよりも確実にセンターに駆けつけられるからである。しかも、世話する人も避難してくる人も顔なじみなのである。今回の災害でも長田区あたりは古くから居住していて近所の仲がよく、隣のおばあちゃんがどこに寝ているのかさえお互いに知っていたのである。死者を多数出したが、それでも、おばあちゃんがいない、娘さんが出てこないと、近所の人たちが確認し救出したのである。この連帯がなければ、被害はまだまだあったのである。この顔見知りの人たちがセンターの運営にあたるところに意義があるのである。

しかし、このような組織を維持するためには、平生に多少の訓練と学校側との緊密な連絡、行政側との詳細な打ち合わせが必要である。瞬間に別の機能の施設と化すといっても、また次の瞬間には、また学校として使用するのであるから、学校側との打ち合わせや連絡は必須のことである。

このような救済センターとしての組織が確立していれば、校長も職員も学校に駆けつけられないままに、登校してみたらすでに学校は被災者で満杯であったといった事態も避けられよう。非常事態が発生すれば、救済センターの長の指揮権が直ちに発動されて、センターとしての機能が作動するからである。

実際には、救済センター委員といった人たちが、近くの住民から選ばれ、委員間で総務・広報・給食・居住・救援物資・ボランティア等といった役割が分担されるであろう。年１回は演習を実施しながら、このときに備蓄食糧を新品と入れ換えたり、機材を点検修理したりすることが必要になってこよう。備蓄食糧で炊き出し演習をしたり、備蓄食糧のバーゲンセールを行うもよい。大型テントを持つといってもテントを張るにはコツもいるので

ある。組立式仮設プレハブといっても被災したときが初めての組み立てというのでは円滑にはいかないであろう。こんな演習をも兼ねて楽しい「防災フェスティバル」を行うのもよい。このようにして、学校にはスペースがある、避難場所としての看板だけがあるというだけの現状から、救済センターとしての学校の実質を築くのである。

こう考えていくと、生徒が減ったからといって、みだりに学校を統廃合するようなことも考え直す必要があるかも知れない。救済拠点を失うことになるからだ。とくに都会では、学校は二度と得られない残された貴重な空間であるとも言える。

救済センターとしての学校と図書館

このような地域の救済センター、防災センターとしての学校はどうあったらよいか。その学校のなかで、われわれの学校図書館は万一のときにどう考えたらよいのか、われわれに課された重い検討課題である。今回の神戸の場合は、備えも覚悟も計画もなく、極端に言えば「避難場所としてこの付近は○○学校」という指定があっただけである。被災者としては、ともかくも雨露の凌げる公の場所ということで、指定避難場所である学校にどっと押しかけた。それだけでは収容しきれずに、区役所や公共図書館にも避難場所を求めて逃げ込んだのである。学校も体育館だけでは収容しきれず教室も図書館も避難場所ということになった。やむを得ないことであった。

私が歩いた範囲でもすべての学校ではないが、閲覧室はもとより学校図書館の事務室の中も、公共図書館のカウンターの中も被災者の避難スペースになっていた。これからのわれわれの課題としてこれでよいのか、図書館が避難スペースとして適切であるのか、落ち着いて検討をしておく必要があるのではないだろうか。現在はこれを問うことすらはばかられる。しかし、図書館は、避難者が立ち退いたら、掃除をすれば元に復するというほど簡単ではない。当分立ち直れないことは明らかである。火急のときにはそれも仕方ないとするのか、学習センターとしての機能を一時的にせよ喪失させてよいものか、公共図書館にあっては文化や情報の拠点を欠いてしまってよいものか、地域の教育や文化の問題ともかかわって今後検討すべきとしみじみ考えた。

災害は忘れずにやってくる

恥ずかしながら白状すると、われわれ日本の図書館人は、このような大地震のときに図書館はどうなったか、というリポートを、5年も前の1990年に入手していたのである。すなわち、スタンフォード大学のD.C.ウェーバー教授は、1989年10月アメリカ・ロマプリエータで起きた地震《M7》において、スタンフォード大学図書館がどのような被害を受けたか、そして何を教訓として得たかについて、「国際図書館セミナー」(1990年 金沢工業大学主催)で、詳細なリポートを発表しているのである。われわれはその悲惨さに驚き、立ち上がった大学の昼夜を分かたない努力に感心しただけに終わったのである。自分の教訓としては、何も生かしてこなかったのである。スタンフォード大学は、すでにこのとき、書架転倒と図書の飛び出しについて図書館が受けたダメージと、その回復にどれだけ骨がおれたかを、口を酸っぱくして対策の急務を説いていたのである。

防災ということは、他山の石とはなかなかなりにくいものである。やはり今回も「神戸は大変だった。かわいそうだった。」ということで終わるのだろうか。災害は忘れたころにやってくるのではない。「災害は忘れずにやってくる」のだ。危機管理策を講じる努力と経費は、被災後の苦労と復旧経費とは、完全に反比例するものであることを、いやというほど教えてくれた。(さの　ともひこ＝姫路獨協大学客員教授　全国SLA前事務局長)

第41回 青少年読書感想文全国コンクール

'95課題図書 〈中学校の部〉

愛と悲しみの12歳

エリザベス・ダイヤーク 作/久米 穣 訳/中村悦子 絵

11歳の少女ネイディーンは、父の実母ライアンと同居することになりました。ライアンは、おしろいプンプン、ネイディーンの気にいらない行動ばかり……。気がつくと、ライアンの左手には小指がありません。そのわけも知らずライアンをきらっていたネイディーンは、12歳の誕生日を前に、その理由もわかり……。

■208ページ/定価1,230円(税込)

学校図書館・公共図書館向け児童図書

'95新刊セット 教科書が楽しくわかる

これはたいへん! ゴミの話

全8巻(NDC519)

1巻 かいじゅうゴミーラはだれだ? ―家庭ゴミの量
2巻 あれもゴミこれもゴミ ―ゴミの定義
3巻 まちがって出したゴミを追え ―ゴミ処理の仕組み
4巻 わが町の大そうじゃ ―ゴミ処理場の建設問題
5巻 ゴミとたたかう町 ―ゴミの減量とリサイクル
6巻 もうすぐ地球はゴミの星 ―廃棄物と地球環境
7巻 ごせんぞさまのゴミ説教 ―江戸時代のゴミ処理
8巻 ぼくらのゴミ作戦 ―ゴミ問題への提案

NDC519

●対象…小学校中学年～中学生
●定価…セット定価(全8巻)22,800円 (本体22,136円)
分売はいたしません。
●体裁…AB判/各40ページ/オールカラー/美麗ケース入り

〒113 東京都文京区向丘2丁目3番10号 ☎(03)3814-2151

文研出版

〒543 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号 ☎(06)779-1531

◆特集／図書館の安全・防災対策

学校図書館施設の安全計画

植松　貞夫

はじめに

今回の大震災では、建築物が人びとの日常生活における利便や快適性はもとより、非常時には生命に直接結びつくものであることを痛感させられた。

図書館も甚大な被害を受けたことが報じられている。中には、避難場所として本が散乱したままで人々の避難生活が展開されている館もあるという。また、数年前まで、可燃物である本をたくさん収蔵しておりながらも、本が炎をあげて燃えることは考えにくいことから「図書館では火災はない」と言われていたが、大震災とほぼ同じ１月半ばに、東京都清瀬市立中央図書館で放火により火災が起こってしまった。

１．安全と建築法規

建築に求められる第一番目の基本性能として、内部に居続けて安全であり、健康であり、そして快適であることが挙げられる。わが国では建物の安全性に関し建築基準法や消防法などの法律が制定されている。さらに、地方公共団体は条例や規則を定め、建物の安全をいっそう細かいレベルまで規定している。しかし、これらの法令の規定はあくまでも安全と快適性のための最低の基準であって、より高い安全性や快適性を追求していかなければならない。その際に大切なことは、第一には、人間は絶対的に安全な環境をつくってきたわけではなく、それぞれの生活や環境に応じて、また社会経済的条件に応じて、それなりの安全システムをつくってきたということである。災害を眼の前にするとややもすれば安全絶対主義的な発想になりがちであることに注意しなければならない。第二には、環境の安全保持には制度的・技術的なものと習慣・伝統的なものの両面が欠かせないことを認識することである。社会のシステムや技術の制度化が進むことによって管理社会化し、人々がそれ以前の社会ではもっていた安全のための有機的な仕組みやノウハウが次第に失われ、災害に対する対応力や、人による安全保持力が弱体化してきていたことが、今回の震災でも反省点として指摘されている。生活の総体を維持し、経済や他の生活機能とのバランスを考え、最小限の労力や費用で最大の効果が得られるような、安全のシステムを再構築していくことが求められていると考えるべきである。

２．日常安全性

建築における災害は、日常災害と非常災害に大別できる。日常時の安全性に関しては前述の法規で規定されているが、実際には数多くの事故が発生してしまっている。その原因の多くは利用者の不注意によるものが大半といえるが、建物が原因となる場合は、法規以前の常識的な配慮不足であることが多く、図書室員など管理者側にも危険性に対する認識が不足している場合もある。

学校図書室で日常時に起こり得る事故と、それへの建築・家具での安全計画を列挙すれば以下のとおりである。

・**墜落**（人が高所より落下する事故）：２階以上の場合、成人でも重心を考慮すれば窓の取り付け位置を床から110センチメートル以上とすればよいが、窓際に造り付け書棚を設けると、その上部に上ってしまうことがあるので、注意しなければならない。また、踏台になるものを置かないようにすることも必要である。

・**転落**（階段などで転がり落ちる事故）：階段からの転落事故は日常災害で最も数が多い。図書館内に階段を設ける場合には、階段の存在を分かりやすい場所とすること、踏み段面に滑りにくい材を用いること、勾配がきつくないこと、階段の手摺の高さ、強度、形状が適切であること、階段全体に十分な明るさがあることなどが基本的な要件である。

・**転倒**（同一水平面で倒れる事故）：床面に不必要な段差を設けない、床はあまり硬くない滑りにくい素材とする、電線などを露出配線しないなど。

・**ぶつかり・はさまれ・こすりなど**（動いてくる物体にはさまれたり、鋭利なものによって、身体の一部を切るなどの事故）：見通しのよい家具配置とすること、ドアの開閉方向や強風時のあおり止めが適切であること、机やカウンターなどの家具の角は、人体と接触した場合に傷害を生ずる恐れのないように緩衝材を用いたり、形状に配慮する。

・**感電**（人が電位差にあるものに触れて感電する事故）：コンセントなどを児童が触れにくい場所にするなど。

・**その他**：同時に多数が入退室しようとしてドアの前で押しあうなどにより事故が発生したり、照明器具の取り付け強度が不十分で落下する事故などが考えられる。

これらの日常安全性の延長上に非常時の安全性保持があるといえる。

３．地震対策

地震の揺れにともなう被害としては以下が挙げられる。

3-1.建物の損壊

今回の大震災でも学校が避難場所になっているように、きちんとした設計・施工が行われている限り、学校の建物が倒壊することはほとんど考えられない。とはいえ、液状化や断層により地盤そのものが変形してしまえばそれもかなわない。

建物を構成している壁には大きく分けて２種類がある。一つは部屋を区画するための壁である。第二は耐震壁あるいは構造壁と呼ばれる壁で、柱と柱の間で揺れに対する筋かいの役割の壁である。簡単にいえば、部屋を区画を取り払って改造したいという時に「壊せる壁」と「壊せない壁」である。前者の壁は大きな揺れには破壊されることがあろう。しかし、耐震壁では大きなひび割れが入ることはあっても壁自体が崩れ落ちることは考えられない。

耐震壁は建物のＸ軸、Ｙ軸方向で全体として均等に設けられていることが望ましい。しかし、一般的な片廊下型の学校の場合、教室間を区切る壁は耐震壁としやすいが、教室の長辺方向にある外気に面する側では大きな窓が欲しい、廊下側の壁は開口部が必要などで耐震壁が設けにくい。そのため、長手方向の揺れに対しては弱くなりやすいので、柱の形状を長方形にするなどの方法がとられる。

大きな変形が起こると天井板が落下することがある。ここで問題となるのは、古い建築物で天井材に石綿を使用している場合があることである。また、学校ではこの構法例は少ないが、鉄骨建築物の場合には熱に弱い鉄骨を保護するための耐火被覆材として石綿を使用した時期がある。石綿は肺癌を発生させるとして使用が禁止され、除去作業が行われてきたがすべてが改修されたわけではない。今回の神戸でも被災した古い建物の解体にともない空気中の石綿の濃度が高くなったことが

報告されている。

私は昨年末に同じ直下型の活断層地震を受けたカリフォルニア州立大学ノースリッジ校の図書館を見学する機会を得たが、ここでは100万冊の開架図書のほとんどが書架から落下した上に、天井板そして天井裏の石綿の耐火被覆材が降り注いだために、本から石綿片を取り除くだけで数か月の作業を要している。

3-2.書架の転倒

書架は配置形式上で分類すれば壁付き型と自立型とに分けられる。前者はさらに、建築と一体で作られる造り付け書架と、後から書架を壁に固定したものとに分けられる。阪神大震災では造り付け書架にはほとんど被害がなかったとされている。壁面に大きな変形のない限り最も揺れに強い形式といえる。後から配置するにはL型金物などで壁に固定する方法がとられるが、当然のことながら壁側にあらかじめ十分な受けの用意が施されていなければ緊結にはならない。市販されているL型の金物などでタンスなどを固定していてもほとんど役に立たなかったと言われているのはそのためである。

地震に対して問題となるのは自立型書架である。複式の書架は一般に約50センチの幅に対して、高さは6段階書架で約180センチあり、利用者の取り出しやすさを考慮して下の方の段にはあまり本を並べることをしないため、重心が高くなりがちである。建設省建築研究所では、家具の奥行きを高さの平方根で割った値が4より大であれば比較的安定、小であれば不安定という転倒の判断基準を公表しているが、本の積載状態によっては4以上でも転倒の恐れは高い。ちなみに奥行き50センチ高さ180センチの複式書架のこの値は約3.7と不安定で、高さ155センチで4.0となる。それ以上の高さの不安定な書架はまず床に固定し、さらに頭つなぎ（トッププレース）を用いてお互い同士をつなぐ。書架にトッププレースをつけたり床に固定してしまうことは、

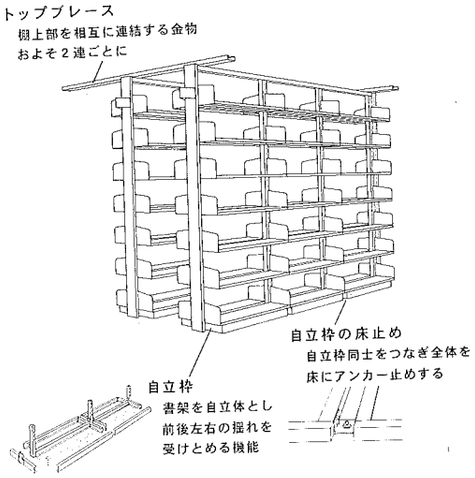


図1　スチール書架の耐震対策

図書館建築の必要要件の一つである将来の配置替えの自由度を大きく制約することになるが、釧路沖地震の被災館の例ではトッププレースだけでは書架の移動が止められなかったことからも、安全性を保つという目的のためには、両方の措置が必要である。

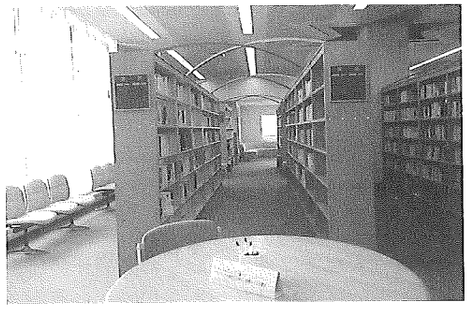


写真　トッププレースの実施例
［トッププレースはうっとうしいとか美しくないとかで敬遠されるが、この程度にデザインされていれば容認されるのでは］

当然であるが書架がその連続方向に崩れた例もある。書架の中央部に筋かいを入れるなど書架自体の十分な強度が固定の際の前提条件である。

スチール製書架の耐震性向上に比べて、木材のもつ柔軟性に期待してか木製書架の耐震対策は進んでいない。木製書架が耐震上有利な根拠はない。木製書架を使用する場合にも、床固定や頭つなぎを施す必要がある。

また、一連の大地震では移動式書架の被害が大きかったことも特筆できる。とりわけ電動の移動式書架は、通路間に人が挟まれるのを防ぐストッパーと呼ばれる感知機構が、急激な揺れにより異常な強さで押し込まれてしまい、通電後も修復不可能な状態になることが顕著な特徴である。

3-3.書架からの本の落下

書架の振動実験の結果では、書架は揺れに伴って本を振り落とすことで安定を保つことが証明されている。従って、書架の転倒を防ぐためには、本は落ちてしまう方がよいことになる。書架から本が振り落とされる結果、ハードカバーの本は装丁が破壊される。大型本や貴重書は低書架の下段部に並べることや、床にカーペットを敷き、落下しても汚れないように清潔にしておくことが現実的な対策であろう。

3-4.その他の家具の転倒や移動

図書館に存在するその他の家具で危険度の高いものは、事務室などに置かれる積み上げ形式のキャビネットである。揺れに伴い施錠していない扉が開き中のものが飛び出し、ついには上段が落下する。上下段を緊結すること、背面を壁に固定すること、引出しや扉は施錠を習慣づけることなどが対策である。

また、キャスター付きのブックトラックなどは動き回ることのないように、然るべき収納場所を定めておくこと、同じくキャスターの付いているパソコン端末台などは常時はロックを施しておくことも必要な措置である。

3-5.備品の落下

考えられるものとしてはパソコンとマイクロリーダーの落下である。マイクロリーダーは比較的安定した形状であるが、パソコンは本体の上に、ディスプレー機を載せるだけのことが多い。企業や大学などで机上に置かれたパソコンが多数落下したと報告されている。しかし、落下場所が悪かった例を除いては、驚くほど被害が少なかったとされている。理由としては、早朝の地震で多くが稼働していなかったのでディスクなどの可動部品が損傷を受けなかったこと、パソコンの構成機器には内部で発生する熱を放出するためのグリルが切り込まれておりこれが衝撃吸収効果があること、搬送時に受ける可能性のある衝撃に比べれば落下そのものは許容範囲内であることなどといわれている。

三面をついたてなどで囲うなどの方法で落下をできる限り防ぐしか方法がない。

4．火災対策

映画「キンダーガートン・コップ」のクライマックスシーンは、犯人の学校図書室への放火から始まる。

火災に際しては、発生した火を何で消すかが問題となる。公共図書館では放水とガスの放出による方法のいずれかあるいは両方が選択されているが、学校図書館では特殊な場合を除いて放水による方法となろう。

放水による消火では、図書は水をかぶってしまい使用不能となる。清瀬市立図書館では8万冊余の図書が燃えたり冠水した。やはり放火が原因の火災で数10万冊の図書が水浸しになってしまったロスアンゼルス市立中央図書館では、冷凍してから真空乾燥することで再生する方法がとられた。貴重なものは耐火金庫に収めておくことも必要である。

4-1.発生防止

失火防止の火気管理につきる。

4-2.拡大防止

火災時の主役は内装材である。天井や壁が可燃物であれば出火から数分で爆発的な火災拡大状態であるフラッシュオーバーとなり、難燃材であればそれがやや遅れ、準不燃材や不燃材ではなかなか火災は拡大しない。机、

椅子、書架などが木製であり窓にカーテンがあれば火災の拡大はいっそう早くなる。ここで大切なのは、消防隊が到着するまでにまず利用者の責任で行わなければならない初期消火である。最も一般的なものは屋内消火栓からの放水である。

4-3.災害対応

初期消火により鎮圧できない場合には避難と煙や炎の制御が問題となる。防火戸などの建築的な手段が正常に機能すること、避難経路に物を置いたりすることのないように、定期的な点検をすることが必要である。

4-4.学校の特例

先に映画の学校では抜打ち的な避難訓練を実施していて、就任初日にそれに遭遇した主人公は、担当の園児をうまく誘導できずに、大いに減点されてしまう。

一般に公共図書館のような不特定多数が利用する施設は、初めてその施設を利用した人でも安全に避難できるように、安全のための規則がいっそう厳しく定められている。例えば、煙にまかれて避難路を見失う人を防ぐため、一定面積の区画ごとに排煙設備を設置することなどである。しかし、学校は児童生徒がいるときには避難誘導の責任者がいること、定期的な避難訓練の実施により児童生徒が避難経路、方法を認知しているものとされ、排煙設備の設置は免除されている。安全を保つソフトな手段である避難訓練を定期的にそして真剣に実施することが大切である。

まとめ

安全計画の基本はまず災害の発生防止であり、人力の及ばない災害に対しては拡大防止が焦点となる。われわれの安全保持の仕組みは、法律や基準などの明示的な規則から、慣習や伝統といった非明示的なものがあり、工学技術や建築技術などのハードなものから、保険・教育・啓蒙というソフトなものまで多種多様に及ぶ。あらかじめある災害を想定してその対策を考えるというよりも、むしろ定常的な生活行為をいかにして保持できるかという視点から、この仕組みを十分に機能させていくことが必要である。

（うえまつ・さだお＝図書館情報大学教授）

学校図書館入門シリーズ―1
「図書の払出し」

森田盛行著
A5判　46P
定価　700円

学校図書館をリフレッシュしよう！

「学校図書館図書整備新5カ年計画」で図書予算が増える学校が多くなっています。
古い本や使えなくなっている本を思い切って廃棄しようと考えている方に最適のブックレットです。

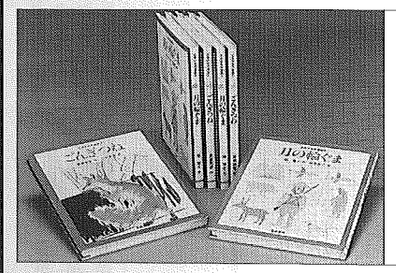
〈本書の内容〉
①あなたの学校図書館を見つめよう
②「図書の払出し」とはどんなこと？
③廃棄でリフレッシュ
④廃棄には基準があります
⑤蔵書点検の方法
⑥払出しの実際
⑦払出しで気をつけたいこと
⑧図書原簿や書架目録の未整備な学校図書館
〈資料〉「学校図書館図書廃棄基準」

〒112
東京都文京区春日2―2―7
全国学校図書館協議会
電話　03(3814)4317
FAX　03(3814)1790

岩崎書店・好評新シリーズ

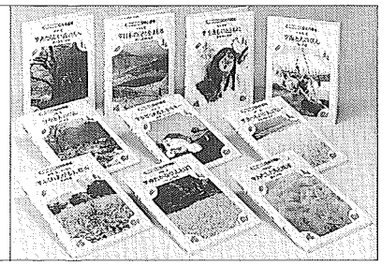
まんがで見る
日本の戦後50年
●全10巻〈小学高～中学生〉定価各2,500円(税込)
谷田川和夫・監修　戦後50年特別企画――この50年をまんがでつづったゆかいな年表。1945年～1994年までの激動の時代を様々な方面から学ぶ。

パソコンでゲームをつくろう
●全7巻〈小学低～中学生〉定価各2,500円(税込)
横地　清・監修　好評『ぼくらのパソコン・ライブラリー』(全12巻)の姉妹編。わかりやすい解説で、現代の子どもたちのゲーム感覚にも最適。初心者から上級者までたのしめる構成です。



教科書にでてくる
日本の名作童話
●全20巻〈小学低～高学年〉定価各1,500円(税込)
新美南吉／宮沢賢治／斎藤隆介／岩崎京子　ほか
教科書に採用された児童文学を、作家別に構成。『やまなし』『てぶくろを買いに』『ひとつの花』他。

学習に役立つ
日本の環境
●全10巻〈小学高～中学生〉定価各2,300円(税込)
阿部　治／岡島成行／瀬田信哉・編集
日本の環境問題がすべてわかるシリーズ。問題解決の糸口を自主的に考えるユニークな本です。



算数であそぼう　●第2期・全10巻〈小学高学年〉定価各2,000円(税込)

アジアを考える本　近くて遠い国　●全7巻〈小学高～中学生〉定価各2,800円(税込)

〒112 東京都文京区水道1-9-2 ☎03(3812)9131
岩崎書店

創刊15周年記念出版"フォア文庫マーブル版"好評刊行中！

フォア文庫
ハートにキ・ラ・リ！(本の宝石)フォア文庫
解説目録進呈!!
フォア文庫の会
岩崎書店/童心社
金の星社/理論社

好評シリーズ

こそあどの森の物語

岡田 淳・作　定価各1500円

❶ふしぎな木の実の料理法

ある日、無口なスキッパーに届いた小包。ところが、手紙が雪でぬれて読めない。送られてきた木の実の料理法をさがして、スキッパーはしぶしぶ森のみんなをたずねることにした。

❷まよなかの魔女の秘密

行方不明になったポットさんをさがして、森のみんなの捜索がはじまる。そのときスキッパーのまえにあらわれた一羽のふくろうと、そこにかくされた意外なひみつとは…!?

❸森のなかの海賊船（近刊）

むかしむかし、こそあどの森に宝物をかくした海賊がいた。その名も「海賊フラフラ」。　—はたしてそのありかは!?その鍵は、ある一冊の本の中にかくされていた。

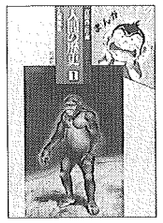
魔法使いのヘングレ・バーニャン

山中 恒・作/石坂 啓・絵

既4巻 定価各1100円

『ヘンゼルとグレーテル』のお話に出てくる魔法使いのばあちゃんがなぜか、マキの家にやってきていすわり、いなくなったネコそっくりにばけてしまう。マキだけしか知らないその秘密のネコがまきおこす痛快なお話が4話です。さし絵は漫画家の石坂啓がかき、まんがのように読むシリーズです。

❶いすわりネコはくいしんぼ
❷あつがりネコ海へいく
❸いじわるネコのひとめぼれ
❹福引きはネコの手をかりて



まんが 人間の歴史

吉川 豊

ヒトはどのようにして巨人になったか——イリインとセガールの名著をもとに、まんがで解り易く、壮大なテーマにいどみます。第1巻は、二本足で歩きはじめた人類の祖先たちの進化のようすをわかりやすく面白くたどります。

全10巻刊行開始
1 人類誕生
2 氷河期の勝利者たち

定価各1200円

「国際アンデルセン賞受賞」記念出版

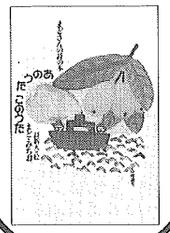
まどさんの詩の本

まど・みちお詩　長新太絵

日本人で初めて作家賞を受けたまどさんの全詩から、テーマ別に39編の詩を選んで2色刷の絵で贈る詩集。全15巻予定の第1集5冊がそろう。

第1集全5冊　定価各1300円

●つぶつぶうた（短詩）
●にほんごにこにこ（ことば遊び）
●むしいっぱい（小さないきもの）
●ものいろいろ（物と道具）
●あのうたこのうた（童謡集）



〔定価税込〕

〒162 東京都新宿区若松町15-6　理論社　☎03(3203)5791/FAX03(3203)2422

創刊15周年記念出版"フォア文庫マーブル版"好評刊行中!

フォア文庫　ハートにキ・ラ・リ!《本の宝石》フォア文庫　解説目録進呈

フォア文庫の会
岩崎書店/童心社
金の星社/理論社

北海道東方沖地震の経験と今後の地震対策

川目　將・谷村和子

北海道東方沖地震で図書9万冊落下

平成6年10月4日午後10時23分、道東太平洋岸を襲った、北海道東方沖地震は、マグニチュード8.1、震度5（一部6）、津波を伴ったすさまじい恐怖の一夜でした。

その夜図書館職員は、貸出期限切れ図書の督促事務を夜10時まで行なっており、全員が帰宅してまもなくのことでした。

幸い閉館後のことで、事故がなかったのが何よりでした。

●図書館の被害状況

・蔵書は10万冊のうち9万冊が、四方から入り乱れて落下
・自動ドア、ダムウエーターの故障
・おはなしのへや、事務室大判ガラスの破損
・トップライトルバーの落下
・排煙網ガラスの落下破損
・天井吸気孔及び壁の剝離
・外壁・内壁亀裂、タイル落下
・塀及びよう壁の落下ひび割れ
・ボイラー煙突全壊

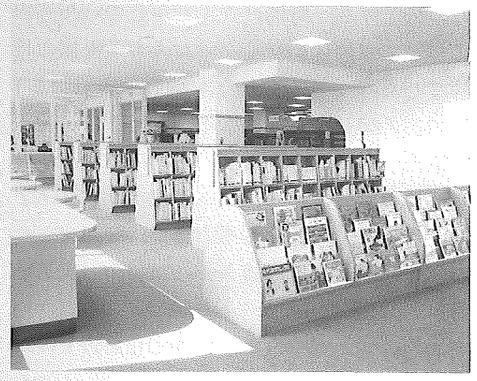
以上、被害額850万円となっている。

（根室市被害総額168億円　局地激甚災害地指定）

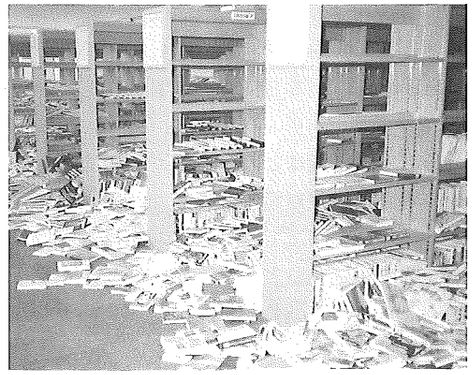
書架や蔵書の落下状況についてもう少し詳しく説明いたします。

①1階

・えほんコーナー　…傾斜つき3段書架
　落下なし
　対策はしていない
・こどもの本コーナー…4段直立型低書架
　ほとんど落下／転倒した書架なし
　対策はしていない
・十代の本コーナー…4段直立型



絵本書架（最も影響がなかった棚）



1階・一般成人書架（落下した本の山）

転倒防止用Ｃ綱（木製に合わせた色）

低書架ほとんど落下／転倒した書架なし
対策はしていない

・一般成人コーナー　…５段直立型書架
ほとんど落下／転倒した書架なし
対策：転倒防止のため上部をアルミで連結

・大型本及び辞典　　…壁面６段書架
上部落下／転倒した書架なし
対策：Ｌ字金具止めと壁に補強材を使用

②２階及び３階の閉架書庫

・児童書書庫
・一般書書庫
・郷土資料書庫
・行政資料書庫
…木製書架・スチール書架

ほとんど転倒しそのため図書は入りまじって落下／復旧に手間がかかる結果となった
対策はしていない

これらの復旧に要した日数は、１階３日間、２・３階は、５日間で計８日間でした。

今後の地震対策はどうすべきか―根室市図書館の場合（書架対策）

・４段の低書架までは特別な対策はしない。これが転倒するときは、建物も相当損壊するときと判断される。また、床止めをしたり対策をすると館内の模様替えのとき不便である。

・５段以上の書架は、上部を連結して転倒しないよう、しっかりと対策する。しかし床止めはしない。長い地震の場合、揺られているうちにビスの穴がゆるくなり止めが効かなくなる。

・壁面書架は転倒しないよう長めの家具転倒防止Ｌ字金具でしっかり止める。壁には止める補強材を入れることを忘れないこと。

・図書の落下防止のために、棚板にへこみを入れたり、サンを取り付けたり、滑り止めをしたりはしない。それらを取り付けることで、本の出し入れが不便になったり、本の傷みが出たりする恐れがある。

・本の落下は多少あっても、書架の転倒は極力防ぐよう対策すること。

・落下した本の復旧作業を少しでも早くするため、本棚の状況を記録しておくこと。

・備品購入のときには、地震対策も充分考慮して、業者とも打ち合せを充分に行なうこと。

（この項は川目將「地震と本棚」LISN82号 P1-4に掲載されたものです。）

傾斜付き絵本欄と大きなガラス

このたびの東方沖の地震は夜の事で、幸い、図書館においては人的被害が有りませんでした。が、私は、かつて経験したことのないほど恐ろしく揺れる家の中で、これでは家が潰れるのではないか、という恐怖の時間を経験したのです。一時的になんとかしのいだものの地震で家に住めなくなった人も多く出た地震でした。

地震の翌日から、根室市図書館では、地震で散乱した本を本棚に戻すために、他施設職員の応援を頼んだり、パートやボランティアの人も加わって一日も早い復旧に努めましたが、その間も余震は続きました。少し大きい余震の時は、天井付近からぱらぱらと細かいものが落ちてくる中での作業でしたので、地震発生時には、「素早く本棚から離れること！」、「強くて長くなりそうだったら手近の

２・３階書庫（倒れた書架と本の山）

机の下に身を隠すこと！」と、注意して作業を進めました。１階開架フロアーの本棚は、背の高いものは地震止めがついていたので倒れはしなかったものの、８連ものの重い木製書架や、ちょっとやそっとでは動きそうにもないサービス用のカウンターまでもがずれ、地震のエネルギーの大きさを知らされました。

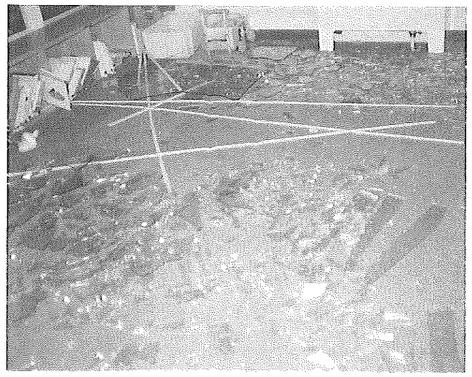
そんな中で、絵本を入れている傾斜付きの書架が、全くと言っていいほど本の落下が無かったのは前述のとおりで、不思議なほどです。この本棚は、30cmくぎりの棚が９つ横に並んだ３段もので、力の弱い子どもにとって絵本も取り出しやすく、このたびの大地震ですら安全で、「子どもに優しい本棚」と言えるかもしれません。

根室市図書館は、旧公民館を４億６百万円で図書館に改装した建物です。このたびの地震は、平成６年５月14日に新装オープンしてから５カ月たたないうちの出来事で、当然、折角きれいにした壁も天井も、あちこち傷んでしまいました。

旧公民館を図書館に改装するに当たって一番頭を悩ましたのは、窓もない真っ暗なホール部分に自然採光をどう取り入れるか、明るくオープンなイメージの開架フロアーにするためにどう改装するかということでした。開架フロアーに天窓を４機とり付けて自然光を取り込んだり、「おはなしのへや」や「事務室」を１階フロアーに設けるに当たっては、仕切りにガラスを使って、透明感を高めたりと、気を配りました。その開放的な雰囲気に、改装としては大変成功したと褒めことばをいただくこともたびたびだったのですが、透明感と明るさを出すために成功したその「ガラス」がこのたびの地震で凶器に化すところでした。図書館の正面玄関入ってすぐのところにある「おはなしのへや」の大きなガラス（233cm×82cm）が、その内部に向かって、６枚の内３枚が倒れて粉々に割れてしまいました。じゅうたん敷きのその部屋に子どもがいる時間帯だったらと思うと、背筋が寒くなる思いです。

根室市隣町、別海町では、平成５年に新築図書館が開館いたしました。図書館内の階段や渡り廊下部分のガラスは、「子どもがぶつかっても蹴飛ばしても割れないものを配慮して使った」と、小中学校で校長先生の経験が長い堺館長が話されていたのを思い出し、こういうことへの配慮を私たちが持ちあわせていなかったことを強く反省いたしました。ガラスを留めているサンも弱すぎ、修復されてからも、その後の地震の度に恐怖を感じております。根室市街地区の商店でも大きくて高そうなガラスが軒並み割れて、根室の町には修復用のガラスがなくなったとまで言われるほどでしたが、そんな中でも、しっかりコーキングしていたものは割れずにすんだという話も伝わってきますので、大きなガラスを使うときには、ガラスやサンの強度やガラスにフ

全国ＳＬＡの刊行物
リリアン・スミスと図書館の児童奉仕に関する論文集
本・子ども・図書館
アデル・フェイジックほか編
高鷲志子　高橋久子訳
Ａ５判・240ページ・定価2,800円（税込）



おはなしの部屋（粉々に割れたガラス）

イルムを張るなど、最初から子どもたちの安全対策のために十分配慮されるべきと切実に思っています。

20年前の地震から

20年前にも大きな地震がありましたが、このときも大変でした。今の図書館に移ってくる前の旧図書館でのできごとでした。

閉架用につくった書庫を、開架にして利用者が自由に出入りできるようにしてありました。ここでは、天地共にしっかりと留めてあるスチール書架は背板の全く無いもので、地震で背中合わせになっている裏側の本棚の本もごちゃごちゃに入りまじって落下し、通路は足の踏み場もないほどでした。３～４列の本が入り交じってしまった物を元のような分類番号順に配架していくのは結構大変な作業なのですが、こういう密集した書庫の中でとても恐ろしいのは、高いところからの大きな本の落下です。ともすれば、あまり利用頻度のない大型の本は、背の届きにくい最上部の棚に置かれることが多いのではないでしょうか。滑りのいいスチール製の書架の本が、２層式書庫の２階部分から１階に落下して小山のようになって白くほこりを舞上げました。落下する本でけがをする利用者がいたら大変でした。幸いそういう事故もなく、みな無事でしたので後から胸をなで下ろしました。この地震の後は、地震のたびに、書庫に向かって、「早く書庫から出てください。」「本棚から早く離れてください。」と大声を張り上げるようになりました。落ちてきた本の当たり所が悪ければ取り返しの付かないことになるかもしれません。

わりとしなやかで地震に強いと思っていたのが、スチール製書架の上も下も留めていない連結式の組み合わせ書架でした。地震の揺れに合わせて揺れるのでしょうか、普段でも頼りげのない感じでしたのに、多少の地震にも、本の落下も少なく本棚は倒れもしませんでした。不思議な感じすらしました。組み立て連結のこの書架がこれまでの大きい地震に倒れなかったので、今の図書館にきても留めずにおきました。ところが、このたびの東方沖地震では全く通用せず、将棋倒しです。書庫用に使っていましたので通路部分も狭く、揺れの方向など旧図書館とはまた条件が違っていましたが、そのすごさをまざまざと見せつけられた思いです。

釧路で大きな地震があっても、奥尻で恐ろしい地震があっても、東方沖地震の一月前にもこの根室でかなりの地震があっても、まさかこのような恐ろしい地震災害が自分たちの身に降りかかるとは思いもしませんでした。あちこちで起こるたびたびの地震は、かえって地震のエネルギーが発散されて、ここしばらく自分たちの方には大丈夫と、勝手な解釈で楽観していたというのが正直なところです。「油断」そのものだったと反省しております。地震や災害というものは、いつ自分のところに起こるかわからないものなのだと今更ながら思うのです。とりとめもなく書き連ねましたが、一つでも参考になることが有りましたら幸いです。阪神大震災の方々には心からのお見舞いと一日も早い復旧をお祈り申し上げます。（この項は、谷村和子執筆）

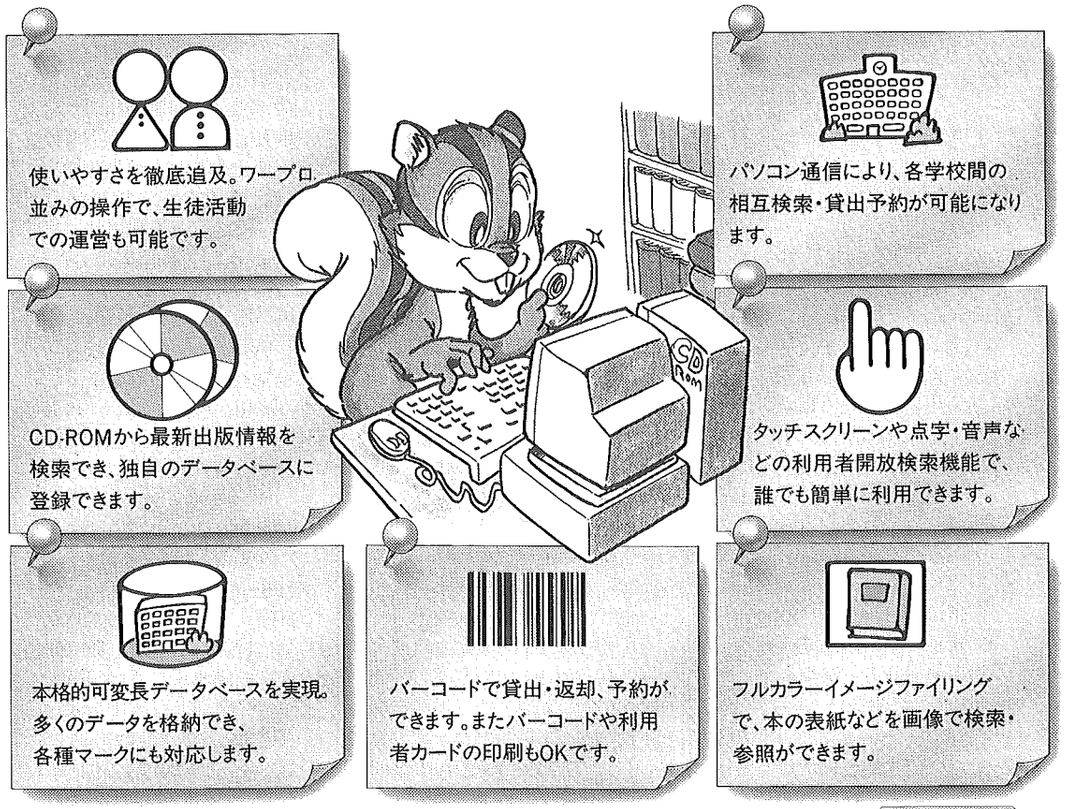
（かわめ・すすむ、たにむら・かずこ＝北海道根室市立図書館）

夢をかたちに 信頼と創造の富士通

FUJITSU

パソコンで本格的な学校図書館情報システムを構築。

日本全国の一般的な図書の検索はもちろん、新しいメディアの活用で、利用者サービスがグンと広がります。



（注）①CD-ROMは、㈱図書館流通センターの製品をサポートします。
②CD-ROMデータは、自館内での使用に限定してください。

■推奨ハード
国際標準機 FM V

学校図書館情報システム SCHOOL-ILIS（スクール・アイリス）
スタンドアロンシステム・LANシステム

今すぐ学校名、お名前、ご住所、電話番号をご記入のうえ、FAXでお送りください。詳しい資料をお届けします。

FAX(043)299-3027

富士通株式会社 パッケージ事業部CAIシステム部
〒261 千葉市美浜区中瀬1-9-3
（幕張システムラボラトリ） ☎(043)299-3267(直)